大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第51集

高畑遺跡

ー大分県立中津南高等学校管理棟改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序　文

本書は、大分県教育委員会が大分県立中津南高等学校の管理棟改築工事に伴い実施した、高畑遺跡の発掘調査報告書です。

高畑遺跡では過去に縄文時代の土偶２体が出土したことで知られていましたが、今回の発掘調査によって弥生時代・古墳時代の住居跡や古代の溝等が確認され、遺跡の年代が縄文時代から古代にわたることが明らかになりました。特に弥生時代の竪穴住居からは良好な土器が出土しており、この地域における基本資料になるものと思われます。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用していただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた大分県立中津南高等学校はじめ関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成22年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長　佐藤英一

例　言

1．本書は大分県中津市丸山町に所在する高畑遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は大分県立中津南高等学校管理棟改築工事の実施に伴い、大分県教育庁学校施設課の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成21年3月7日から同3月27日にかけて実施し、埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当　主事　横澤　慈が担当した。

4．発掘調査に際し調査の支援業務委託を実施した。現地での写真撮影や遺構実測等の作業は支援業務委託の受託者である明大工業株式会社（調査技師　木村宜夫、調査助手　小田貴志、佐藤万里江）が行った。

5．遺物洗浄、注記、接合、実測、トレース等報告書作成に伴う整理作業は株式会社九州文化財総合研究所に委託したが、実測、トレースの一部は横澤が行った。遺物写真の撮影は横澤及び河野真幸（埋蔵文化財センター資料管理班嘱託）が行った。

6．出土遺物及び写真・実測図等の調査記録は大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田字ビワノ門1977番地）で保管している。

7．本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。

8．本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SB（掘立柱建物）、SH（竪穴住居）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（ピット）、SX（性格不明遺構及び集石遺構、土器集中部等）

9．本書の執筆・編集は横澤が行った。

目　　次

第１章　はじめに…… 1
第１節　調査に至る経過…… 1
第２節　調査組織の構成…… 1
第３節　調査の経過…… 2

第２章　遺跡の位置と環境…… 3
第１節　地理的環境…… 3
第２節　歴史的環境…… 3
第３節　高畑遺跡の立地と採集遺物…… 5

第３章　調査の成果…… 6
第１節　調査の概要と調査区の設定…… 6
第２節　調査区の基本層序…… 6
第３節　調査の成果…… 9
１．　第３層上面の遺構…… 9
２．　第５層上面の遺構…… 19
（１）　弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構…… 19
（２）　古墳時代の遺構…… 30
（３）　古代の遺構…… 40
（４）　その他の遺構…… 45
（５）　包含層出土遺物…… 54

第４章　総括…… 61
遺物観察表…… 63
写真図版…… 67
報告書抄録…… 83

挿 図 目 次

第 1 図　高畑遺跡位置図 …… 2
第 2 図　高畑遺跡と中津市周辺の遺跡 …… 4
第 3 図　高畑遺跡　昭和２４年出土縄文土器・土偶実測図 …… 5
第 4 図　高畑遺跡発掘調査地点図 …… 6
第 5 図　高畑遺跡土層断面図 …… 7
第 6 図　高畑遺跡遺構配置図（第１面）…… 8
第 7 図　SD3 出土遺物実測図（1）…… 9
第 8 図　SD3 出土遺物実測図（2）…… 9
第 9 図　SD9 出土遺物実測図 …… 9
第 10 図　SK1・SK2 実測図 …… 10
第 11 図　SK1 出土遺物実測図 …… 10
第 12 図　SK2 出土遺物実測図 …… 11
第 13 図　SK5・SK6 実測図 …… 12
第 14 図　SK5・K6 出土遺物実測図 …… 12
第 15 図　SK20 実測図 …… 13
第 16 図　SK20 出土遺物実測図 …… 14
第 17 図　SK21 実測図 …… 15
第 18 図　SK21 出土遺物実測図 …… 15
第 19 図　SD23 実測図 …… 16
第 20 図　SD23 出土遺物実測図 …… 17
第 21 図　SK7 実測図 …… 18
第 22 図　SK29 実測図 …… 18
第 23 図　SK29 出土遺物実測図 …… 18
第 24 図　SK30 実測図 …… 18
第 25 図　SK30 出土遺物実測図 …… 18
第 26 図　高畑遺跡遺構配置図（第２面）…… 20
第 27 図　SX15･SX16･SX17 配置図 …… 21
第 28 図　SX15 実測図 …… 22
第 29 図　SX15 出土遺物実測図 …… 22
第 30 図　SX16 実測図 …… 23
第 31 図　SX16 出土遺物実測図（1）…… 24
第 32 図　SX16 出土遺物実測図（2）…… 25
第 33 図　SX17 実測図 …… 26
第 34 図　SX17 出土遺物実測図 …… 26
第 35 図　SH32 実測図 …… 27
第 36 図　SH32 出土遺物実測図（1）…… 28
第 37 図　SH32 出土遺物実測図（2）…… 29
第 38 図　SH70 実測図 …… 30
第 39 図　SH70 出土遺物実測図 …… 31
第 40 図　SH64 実測図 …… 32
第 41 図　SH64 出土遺物実測図 …… 33
第 42 図　SB1 実測図 …… 34
第 43 図　SB1 出土遺物実測図 …… 35
第 44 図　SX31 実測図 …… 35
第 45 図　SX31 出土遺物実測図 …… 35
第 46 図　SK77･SK88･SK89･SP71･SP72 実測図 …… 36
第 47 図　SK77･SK89 出土遺物実測図 …… 36
第 48 図　SK79･SK81･SK82･SK86･SK87 実測図 …… 37
第 49 図　SK82 出土遺物実測図 …… 38
第 50 図　SK79･SK87 出土遺物実測図 …… 38
第 51 図　SK80 実測図 …… 39
第 52 図　SK80 出土遺物実測図 …… 39
第 53 図　SK18 実測図 …… 40
第 54 図　SK18 出土遺物実測図 …… 40
第 55 図　SD22 実測図 …… 41
第 56 図　SD22 出土遺物実測図 …… 42
第 57 図　SD66 実測図 …… 43
第 58 図　SD66 出土遺物実測図（1）…… 44
第 59 図　SD66 出土遺物実測図（2）…… 45
第 60 図　SD66 出土遺物実測図（3）…… 46
第 61 図　SK41･SK42･SK43･SK69 実測図 …… 47
第 62 図　SK43･SK69 出土遺物実測図 …… 47
第 63 図　SD19･SX53 実測図 …… 48
第 64 図　SK84･SK94･SK95 実測図 …… 49
第 65 図　SX36 実測図 …… 50
第 66 図　SX36 出土遺物実測図 …… 50
第 67 図　SK44･SK57･SK73･SK78 実測図 …… 50
第 68 図　SK91 実測図 …… 51
第 69 図　ピット実測図 …… 51
第 70 図　ピット出土遺物実測図 …… 51
第 71 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（1）…… 53
第 72 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（2）…… 54
第 73 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（3）…… 55
第 74 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（4）…… 56
第 75 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（5）…… 57
第 76 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（6）…… 58
第 77 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（7）…… 59
第 78 図　グリッド別 縄文土器・石器出土傾向 …… 62

写 真 図 版 目 次

図版 1 …… 67
調査区全景写真（西から）
調査区東壁土層断面
調査区南壁土層断面

図版 2 …… 68
SK1
SK2
SK29
SK30
SX15・SX16・SX17
SX15
SX16
SX17

図版 3 …… 69
SH32 検出状況
SH32 完掘
SH64
SH64 遺物出土状況
SB1
SK82
SK80
SK18

図版 4 …… 70
SD22
SD66 遺物出土状況
SD66 土層断面
SD66 完掘
SK43・SK69
SX36

図版 5 …… 71
SK20 出土遺物

図版 6 …… 72
SD23 出土遺物
SK29 出土陶器徳利
SK30 出土磁器小坏、皿

図版 7 …… 73
SX15 出土遺物
SX16 出土遺物

図版 8 …… 74
SX16 出土弥生土器

図版 9 …… 75
SH32 出土弥生土器

図版 10 …… 76
SH70 出土土師器
SH64 出土須恵器・土師器
SB1 出土須恵器
SX31 出土須恵器・土師器

図版 11 …… 77
SK80 出土土師器
SK18 出土須恵器
SD22 出土土師器
SK69 出土須恵器
SK43 出土黒色土器
SD66 出土白磁・緑釉陶器

図版 12 …… 78
SD66 出土遺物

図版 13 …… 79
高畑遺跡出土縄文土器

図版 14 …… 80
高畑遺跡出土縄文土器・剥片石器類・礫石器
石庖丁

図版 15 …… 81
包含層出土遺物

図版 16 …… 82
包含層出土遺物
紡錘車
土製品

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

大分県教育委員会では安全・安心な学校づくりの一環として平成19年度から県立学校の耐震化事業を進めており、平成20年度に中津南高校の管理棟改築工事が行われることとなった。その中津南高校の敷地内は高畑遺跡として周知されているため、まず既存管理棟の解体工事に伴い、平成21年2月16日に確認調査を実施した。その結果、須恵器を含む遺物包含層と、その下に若干のピットが確認され、遺構の広がりが予想されたことから本調査が必要との判断に至った。これを受けて埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関と協議を行ったところ、工事の工期延長によって教育活動に影響が生じること、確認調査で検出した遺構・遺物が少ないことから、平成20年度内に本調査を実施することとなった。

発掘調査は既存管理棟解体工事の終了を待って着手し、平成21年3月7日から表土掘削を開始、3月11日から包含層や遺構発掘等の人力掘削を行い、3月27日の埋め戻し、調査器材等の撤収をもって調査を終了した。

整理報告書作成は平成21年度に実施し、本書の刊行をもって本事業を完了した。

平成20年度及び21年度の調査体制は以下のとおりである。

第2節　調査組織の構成

平成20年度　本発掘調査

調査主体	大分県教育委員会	
調査機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター	
	所　長	佐藤　英一
調査事務	総務課長	宮永　敬三
	総務課　副主幹	久寿米木 百合子
	同　主査	徳脇　仁志
調査担当	次長兼調査第一課長	坂本　嘉弘
	大型事業担当　主事	横澤　慈（本調査担当）

平成21年度　整理報告書作成

調査主体	大分県教育委員会	
調査機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター	
	所　長	佐藤　英一
	次　長	坂本　嘉弘
調査事務	管理予算班　主幹	宮永　敬三
	同　副主幹	久寿米木 百合子
	同　副主幹	徳脇　仁志
調査担当	大型事業班　主事	横澤　慈（整理報告書作成担当）

第3節　調査の経過

3月 7 日　重機による表土除去。

3月 8 日　ダンプによる排土の搬出。

3月10日　高校入試のため作業中止。

3月11日　人力作業開始。調査区グリッドの設定。

3月12日　埋蔵文化財センター　村上 久和主幹来跡。

3月18日　中津南高校　栗原 眞教頭来跡。

3月20日　日田市教育委員会　今田 秀樹氏来跡。

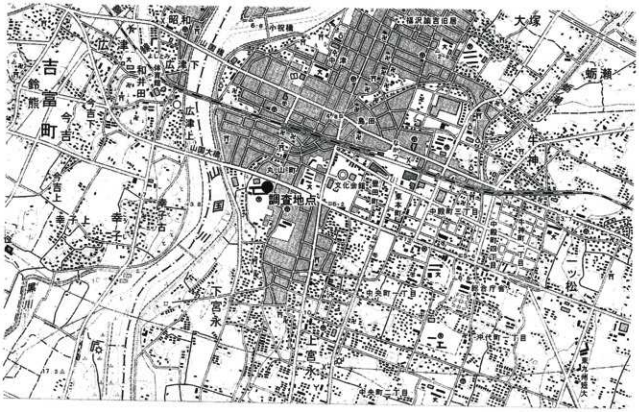
3月23日　中津南高校の生徒48名（1学年26名、2学年22名）を対象に日本史授業の一環として現地説明会を実施。
この日から受託業者の調査助手を2名に増員。

3月24日　県教育庁文化課　吉田 寛副主幹来跡。

3月25日　埋蔵文化財センター　栗田 勝弘調査第二課長、後藤 一重主幹、徳脇 仁志主査来跡。

3月26日　調査区全体の写真撮影。

3月27日　調査区の埋め戻し。調査事務所、調査器材を撤収し、調査完了。



第１図　高畑遺跡位置図（S=1/25,000「中津」）

発掘調査風景

中津南高校生徒の現地見学

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中津市は大分県の北西に位置する。平成17年３月には旧山国町・耶馬渓町・本耶馬渓町・三光村と合併し、現在の市域となっている。市の西端を一級河川である山国川が流れ周防灘に注いでいるが、この山国川が福岡県との県境となっている。

中津市域の北西海岸部は山国川によって形成された扇状地が広がり、沖代平野等の可耕地が展開する。南には標高659.4ｍの八面山が聳え、東南部には八面山から派生した洪積台地の下毛原台地が広がっている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代の遺跡は才木遺跡（82）や大坪遺跡（70）で石器が出土しているが、明確な痕跡に乏しい。

縄文時代では黒水遺跡（69）や諸田南遺跡（99）、定留遺跡（33）で陥し穴や早期の土器が出土している。明確な集落が確認されるのは後期以降で、山国川流域の佐知遺跡（118）や佐知久保畑遺跡（117）、犬丸川流域のボウガキ遺跡（50）、両者の間の微高地上にある槙遺跡（109）で住居跡が確認されている。ボウガキ遺跡では住居内に埋葬人骨も確認されている。

弥生時代になると遺跡は平野部でも確認されるようになる。森山遺跡（122）では前期～後期の集落が、福島遺跡（49）では中期の集落が、上ノ原平原遺跡（91）では前期後葉～末の貯蔵穴群が確認されている。

古墳時代には微高地上に集落が形成され、山国川流域には墓域が目立つ。２基からなる弊旗邸古墳群（61）の他、勘助野地遺跡（62）では周溝を持つ方形墳が、上ノ原横穴墓群（116）では100基を越える横穴が確認されている。また、南東部野依・伊藤田地区では窯が築かれ（81）、６～８世紀にかけて須恵器や瓦が生産される。

古代には宇佐神宮に向かって古代豊前道（104）、いわゆる勅使街道が東西を通り、それに面して多くの遺跡が確認される。７世紀末に成立した白鳳系寺院である相原廃寺（41）、下毛郡衙正倉に比定される長者屋敷遺跡（88）、横穴式石室から火葬墓への変遷が確認された相原山首遺跡（87）、製鉄炉が確認された伊藤田中遺跡（79）等であり、８世紀初頭に施行されたとされる沖代地区条里跡（6）もこの勅使街道を南限とする。

中世には八並城（45）、大幡城（68）等の中世城館が知られ、また堀によって方形に区画された居館が黒水遺跡（69）拜香地区や石堂池遺跡（95）等で確認されている。また黒水遺跡では土坑墓や集落が、安平遺跡（77）では鍛冶工房とそれに付随する集落が発掘されている。

近世には黒田氏によって中津城（2）が成立し、その後細川氏、小笠原氏によって整備され、奥平氏の時に明治時代を迎える。中津城の城下町（3）は細川時代に町割りの原形が作られ、続く小笠原時代に大幅に整備されている。高畑は城下の外れであったが、文久年間以降に江戸から帰郷した武士を迎えるために組屋敷地として開かれている[註1)]。

近代以降、高畑の地に学校が建設される。明治26年に中津南高校の前身である中津尋常中学校が建設、翌明治27年に大分尋常中学校の分校として現在の位置に新築された。その後大分県立中津尋常中学校、大分県立中津中学校と変遷し、戦後の昭和23年の新学制により中津中学校と高等女学校を併合し大分県立中津第一高等学校となっている。昭和26年には中津西高校と改称、昭和28年には旧中津中学校と旧高等女学校を分離独立し、前者が中津南高校、後者は中津北高校となっている。昭和36年４月には火災が発生し、北館、宿直室等を焼失、昭和38年８月に鉄筋の管理棟及び南館、昭和39年に北館が落成し、現在も校舎として利用されている。平成５年には創立100周年を迎えて現在に至っている。

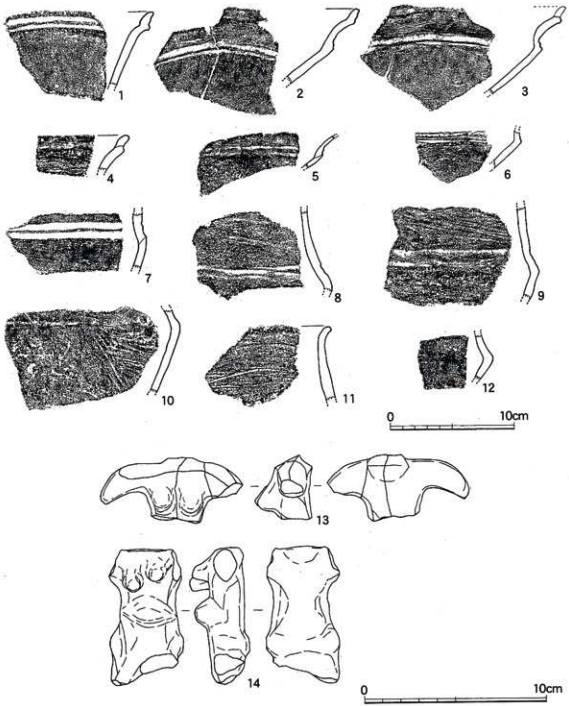
註1）渡辺澄夫他編 1991『角川日本地名大辞典44　大分県』角川書店

第 2 図　高畑遺跡と中津市周辺の遺跡（S=1/50,000）

1. 高畑遺跡
2. 中津城
3. 中津城下町遺跡
4. 桜田小学校校庭遺跡
5. 宮永城跡
6. 沖代地区条里跡
7. 中区城跡
8. 石神城跡
9. 一ツ松城跡
10. 諸の巣城跡
11. 亀山古墳
12. 合馬遺跡
13. ガラヌノ遺跡
14. 仝横遺跡
15. 舞手橋東段上遺跡
16. 是岡遺跡
17. 安松遺跡
18. 是他遺跡
19. 和間只塚
20. 高瀬遺跡
21. 上万田遺跡
22. 河原田城跡
23. 沖代小学校校庭遺跡
24. 下他永遺跡
25. 上他永遺跡
26. 末広城跡
27. 西永添遺跡
28. 梶原遺跡
29. 上如永遺跡
30. 中原遺跡
31. 大悲山地区条里跡
32. 原遺跡
33. 定留遺跡
34. 北原遺跡
35. 土木屋塚
36. 田丸城跡
37. 長久寺貝塚
38. 福永城跡
39. 市場遺跡
40. 三口遺跡
41. 相原廃寺
42. 法華寺城跡
43. 台遺跡
44. 永添中岡遺跡
45. 八並城跡
46. 東ノ原遺跡
47. 御沼池河辺遺跡
48. 山中城跡
49. 福島遺跡
50. ボウガキ遺跡
51. 入知屋塚
52. 三保遺跡
53. 城上遺跡
54. 下伊藤田城跡
55. 黒川古墳
56. 坂手前横穴墓群
57. 熊作神社裏山古墳
58. 坂手隈城跡
59. 坂手隈横穴墓群
60. 相原古墳群
61. 幣旗郡古墳群
62. 鼎跡野地遺跡
63. 上入塚古墳
64. 柳ヶ迫池東遺跡
65. 八幡町遺跡
66. 大池南遺跡
67. 東次郎内遺跡
68. 犬蓼城跡
69. 黒水遺跡
70. 大坪遺跡
71. 樋多田遺跡
72. 犬丸川流域遺跡
73. 宇上横穴墓
74. 岩井崎横穴墓群
75. 上伊藤田城跡（草場城跡）
76. 寺辺遺跡
77. 安平遺跡
78. 城山横穴墓群
79. 伊藤田田中遺跡
80. 城山古墳群
81. 野秋・伊藤田窯跡群
82. 才木遺跡
83. 鎮田遺跡
84. 中尾城跡
85. 犬丸城跡
86. 野秋地区条里跡
87. 相原山貝塚遺跡
88. 長者屋敷遺跡
89. 福岡田遺跡
90. 大道塚遺跡
91. 上ノ原平原遺跡
92. 田尻大迫遺跡
93. 東原遺跡
94. 舞手川流域遺跡
95. 石釜池遺跡
96. 清次郎原遺跡
97. 上ノ原福岡塚遺跡
98. 前田遺跡
99. 鎮田南遺跡
100. 上畑成遺跡
101. 伊藤田穂屋遺跡
102. 馬下遺跡
103. 池永城跡
104. 古代豊前道
105. 町屋屋敷遺跡
106. 板屋敷遺跡
107. 北小枇杷遺跡
108. 屋敷田遺跡
109. 橋遺跡
110. 中ノ林遺跡
111. 田代遺跡
112. 畑中遺跡
113. 東浜遺跡
114. 加来屋屋敷遺跡
115. 加来東遺跡
116. 上ノ原横穴墓群
117. 佐知久保畑遺跡
118. 佐知遺跡
119. 原口遺跡
120. 梅尾角遺跡
121. 北平横穴墓群
122. 森山遺跡
123. 洗添横穴墓群
124. 美鶴尾遺跡
125. 倉谷平遺跡
126. 耳とり池遺跡
127. 上ノ原遺跡
128. 丁ノ坪遺跡

第３節　高畑遺跡の立地と採集遺物

今回発掘調査を実施した高畑遺跡は山国川右岸の自然堤防上に立地する遺跡といわれるが、現在では遺跡は中津南高校の敷地となっており、また周囲も市街地化が進行していて微地形の観察は極めて困難である。高畑遺跡ではこれまで発掘調査は行われていない。しかし、昭和 24 年にグラウンドの砂場を作る際に縄文土器とともに土偶２点が出土しており、その資料の一部が公表[註2)]されている（第３図）。縄文土器は有文の深鉢と浅鉢、無文の深鉢があり、口縁部と胴部に凹線文を施す特徴から後期末～晩期初頭に位置づけられるものである。２体の土偶はいずれも頭部・脚部を欠損するが胸部や腹部に膨らみが表現されるもので、いずれも女性、特に 14 は妊婦を表現したものである。現在、この２体の土偶は中津市の指定文化財となっている。



第３図　高畑遺跡　昭和 24 年出土縄文土器・土偶実測図

註 2）坂本嘉弘他 1979「宇佐平野周辺の縄文遺跡」『石原貝塚・西和田貝塚－大分県宇佐平野周辺の縄文時代貝塚の調査－』大分県教育委員会

第3章　調査の成果

第1節　調査の概要と調査区の設定

調査区は新築される管理棟の位置にあたり、大半は旧管理棟と重複するが南に下がる位置にある。

発掘調査は既存管理棟の解体後に着手した。調査区内には世界測地系の座標にそって10m方眼のグリッドを設定し、第6図に示すように西からA～Fのアルファベット、北から1～3の数字を付し、各グリッドは例えばA1区のようにアルファベットと数字の順に呼称した。遺構は検出した順に番号を付し、報告書作成にあたっては調査時の番号をそのまま踏襲したため、報告時に番号が前後することがある。

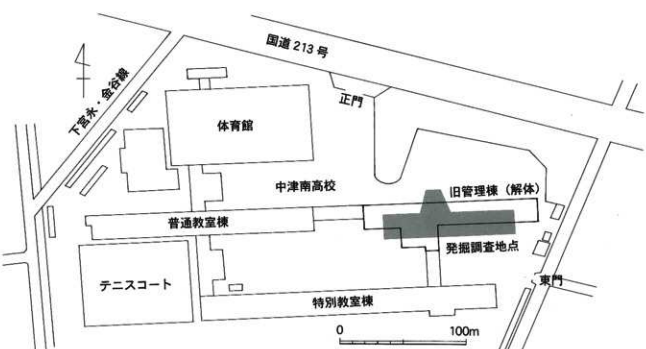
調査は確認調査で把握した表土層及び近世の水田層をバックホウで除去した後、その下にある遺物包含層の掘削及び遺構検出・遺構発掘を人力で行った。調査の結果、弥生時代後期と古墳時代～古代の竪穴住居と古墳時代の掘立柱建物、土坑、古代の土坑や溝等を検出し、当該期の集落跡であることが明らかとなった。また、遺物包含層の上面では近世以降の遺構も確認している。当初期待された縄文時代については明確な遺構こそ確認できなかったが、土器や石器が一定量出土しており、周囲に集落の存在を予想させる。

第2節　調査区の基本層序

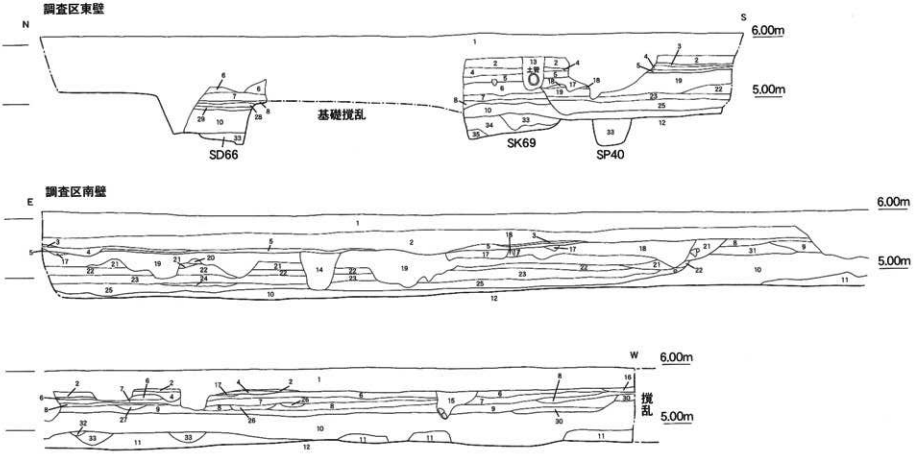
調査区の基本層序を第5図に示す。調査区の土層観察の結果、5層に大別できた。

第1層は学校に伴う盛土層であり、5層に細別される。1-1層は現代の盛土層である。1-2層は多量の炭を含む黒色土層である。中津南高校は昭和36年に火災に遭っており、当該層はこの時の火災層である。旧校舎は木造瓦葺きの建物であり、この層中には被熱により赤変した瓦が多量に含まれていた他、焼け焦げた教科書も見られた。層の厚さは調査区の南東側が厚く、西及び北側にいくにつれて堆積は薄い。1-3層は明褐色土で、1-2層同様昭和36年の火災層（焼土）と考えられる。1-4層は灰褐色砂層、1-5層は硬くしまる黒褐色土層である。

第2層は学校建設以前の耕作土層で、4層に細分できる。2-1層は灰色シルト質土、2-2層は淡褐灰色シルト質土、2-3層は灰褐色シルト質土、2-4層は灰黄褐色シルト質土である。2-2層以下は酸化鉄分の沈着が認められる。



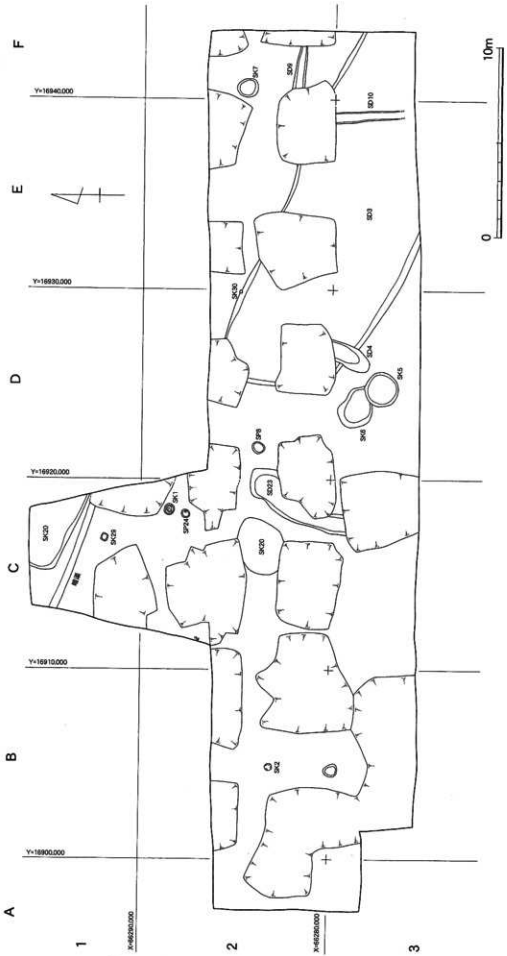
第4図　高畑遺跡発掘調査地点図



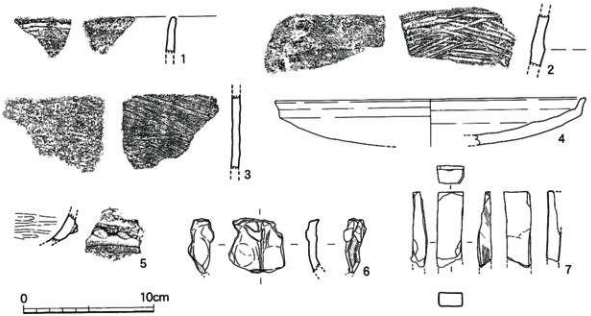
1. 現代盛土（1-1 層）
2. 瓦を含む黒色土（1-2 層）
3. 明褐色土（1-3 層）
4. 灰褐色砂（1-4 層）
5. 硬くしまる黒褐色土（1-5 層）
6. 灰色シルト質土（2-1 層）
7. 淡褐灰色シルト質土　酸化鉄分含む（2-2 層）
8. 灰褐色シルト質土　酸化鉄分含む（2-3 層）
9. 灰黄褐色シルト質土　酸化鉄分含む（2-4 層）
10. 暗灰褐色シルト質土　炭含む（3 層）
11. 暗褐色土が斑状に混じる淡褐色シルト質土（4 層）
12. 淡褐色シルト（5 層）
13. 灰黄褐色砂（暗渠 =SD9）
14. 少量の炭含む淡褐色土（暗渠 =SD10）
15. 砂混じりの灰褐色土
16. 淡灰色砂
17. 暗灰色土
18. 褐色土　炭含む
19. 炭、礫含む淡灰褐色土
20. 暗灰色土と淡灰色砂がマーブル状に堆積する土
21. 灰色土
22. 淡褐灰色土　酸化鉄分少量含む
23. 明黄灰色土　酸化鉄分沈着層
24. マンガン混じりの暗褐灰色土
25. 炭、少量のマンガン混じる灰色土
26. 褐灰色土
27. 黄灰色土
28. マンガン混じる灰褐色土
29. 淡灰色土
30. マンガン混じる淡灰褐色シルト
31. 淡黄灰色土
32. 黒褐色土　焼土、炭含む
33. 暗褐色土
34. 黄色土混じりの暗褐色土　炭少量含む
35. 暗褐色土の混じる淡褐色シルト質土

SD3

第 5 図　高畑遺跡土層断面図



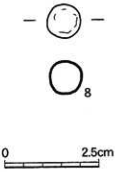
第６図　高畑遺跡遺構配置図（第１面）



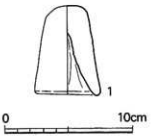
第７図　SD3 出土遺物実測図（1）

第３層は暗灰褐色シルト質土で、縄文時代から中世の遺物を包含しているが、古墳時代から古代の遺物が多い。この層の上部の掘削時に一部近世陶磁器が出土したが、上位層や旧校舎基礎等からの混入であろう。

第４層は暗褐色土が斑状に混じる淡褐色シルト質土である。第３層同様遺物を含むが、堆積は部分的である。



第８図　SD3 出土遺物実測図（2）



第９図　SD9 出土遺物実測図

第５層は淡褐色シルト質土の無遺物層で、第２面の遺構はこの層の上面から掘り込んでいる。

第３節　調査の成果

１．第３層上面の遺構

第１層及び第２層を重機で除去した後、第３層の上面を精査したところ、土坑や溝、埋甕等の近世以降の遺構を確認できた（第６図）。

SD3（第６図）

調査区の東半、Ｄ～Ｆ区で検出した溝状遺構で、幅約 7.5 mを測る。埋土は第２層に酷似し、近代以降の遺物を含むため表土除去時に大部分を重機で掘り下げている。そのため出土遺物は多くはないが、縄文土器や陶磁器、土製品、石製品等が出土している。

SD3 出土遺物

第７図１～３は縄文土器で、いずれも深鉢である。４は焼締陶器の盤で、近世以降のものであろう。５は土師質の捏鉢で、いわゆる高村焼の製品である。外面に凸帯を貼り付け、上面には指頭による刻みを施す。６は土人形の破片で、手に棒

状のものを握っているような表現が見受けられるが詳細は不明。7は砥石で、使用による擦痕が残る。第8図8は鉛玉である。火縄銃弾の可能性もあるが、やや小振りの印象を受ける。

SD4（第6図）

D3区で検出した溝状遺構である。SD3を切ることから近代以降の遺構で、埋土の粘性のある灰色土中から多量の瓦片が出土している。

SD9・SD10（第6図）

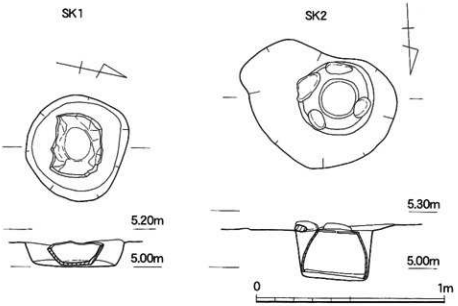
F2・E3区で検出した、土管を埋設した暗渠の底部分である。遺物が出土したため遺構番号を付したが、土層断面図に示すとおり焼土層の下から掘り込んでおり、焼失前の校舎に伴う配管である。

SD9 出土遺物

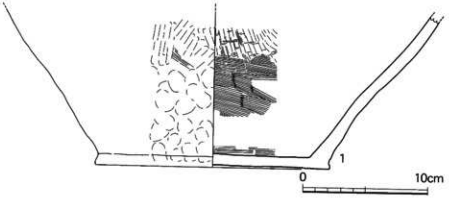
第9図は土師質の用途不明品。裾部から先端にかけて直線的に延び、先端は丸い。

SK1（第10図）

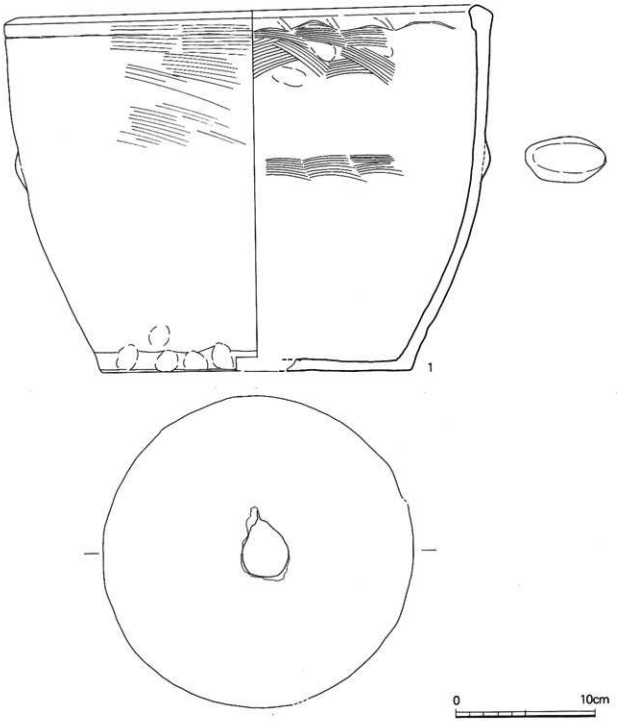
C2区で検出した埋甕遺構であるが、甕の上半部は既に削平を受け、底部付近しか残存していない。平面形状はやや歪な円形で、直径は約0.6 m、深さ約0.3 mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。埋設された甕の他に遺物は出土していない。



第10図　SK1・SK2実測図



第11図　SK1出土遺物実測図



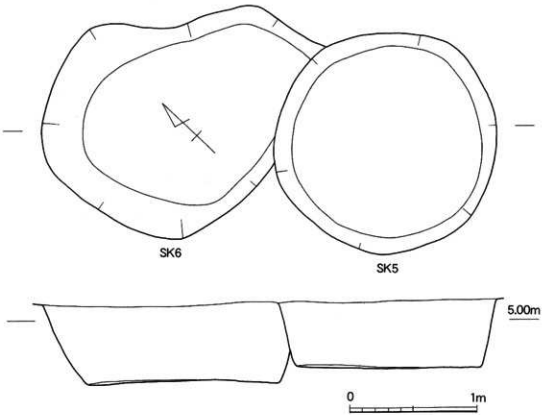
第 12 図　SK2 出土遺物実測図

SK1 出土遺物

第 11 図 1 は素焼きの甕で、外面に指頭圧痕、内面はハケ目が残る。

SK2（第 10 図）

B2 区で検出した遺構で、素焼きの甕を伏せた状態で埋置し、上部に河原石を 4 個配置している。甕の底部は割れ、内部に落ちた状態であったが、底面の中央には穿孔がある。甕設置部は直径約 0.4 m の円形で、その周囲は不整形に若干落ち込んでいる。水琴窟の可能性も考えたが、導水部は確認できず遺構の性格は不明である。



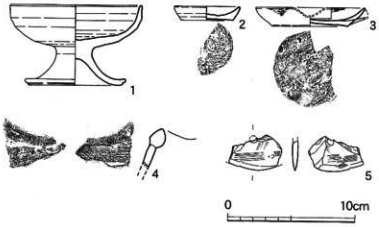
第 13 図　SK5・SK6 実測図

SK2 出土遺物

第 12 図は土師質土器の甕で、胴部中央に 2 箇所痕跡的な把手を貼り付ける。底面には直径 3 ～ 4cm の穿孔がある。

SK5・6（第 13 図）

D3 区で検出した土坑で、SK5 が SK6 を切っている。SK5 は平面円形で、直径約 1.8 m、深さ約 0.5 m を測る。埋土は少量の明黄褐色土の混じる灰褐色シルト質土で、粘性は強い。SK6 は平面不整形で、長辺約 2.3 m、短辺約 1.8 m、深さ約 0.6 m を測る。埋土は明黄褐色土の混じる灰褐色シルト質土で、粘性は強く多量の礫を含む。この 2 基の土坑からは縄文土器、土師器、須恵器、石庖丁片の他、近世以降の陶磁器等が出土している。



第 14 図　SK5・SK6 出土遺物実測図

SK5・6 出土遺物

第 14 図 1 は須恵器の高坏である。坏部は丸く、脚部は広がり端面に沈線を持つ。2・3 は土師器の皿で、いずれも底面に回転糸切り痕を残す。3 は煤の付着した灯明皿で、口縁部の一方が片口状になっている。4 は縄文土器の浅鉢の口縁部破片で、リボン状の突起を貼り付ける特徴から晩期中葉に比定される。5 は石庖丁の破片で、全体を研磨して刃部を作り出す。

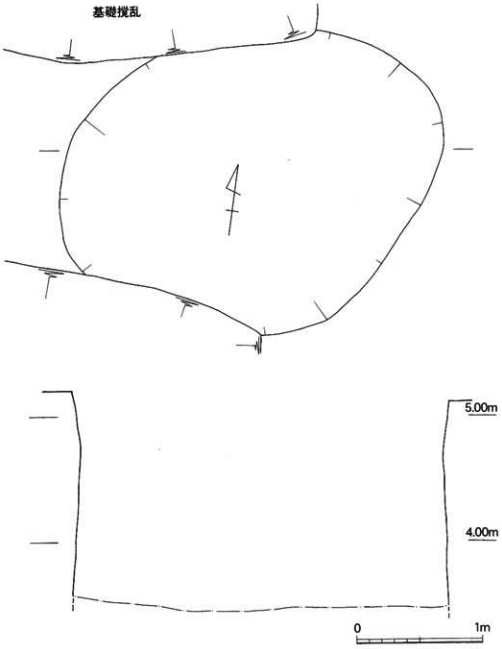
SK20（第15図）

C2区で検出した土坑である。南北両端は旧管理棟基礎の撹乱を受けるが、平面は隅丸方形を呈し長辺約3.1m、短辺約2.3mを測る。埋土は上層が瓦を含む砂質の灰黄褐色土で、その下は拳大程度の礫が詰まっていた。この礫層の上面まで掘り下げたが、内部がフラスコ状に広がり、かつ内部の礫層が厚く掘削により周囲が崩壊する危険があったため、これ以上の掘り下げを行わなかった。遺物は陶磁器や土師質焜炉、ガラス瓶等近世から近代のものが多く、それに混じって縄文土器、須恵器、土師器等が出土している。

SK20 出土遺物

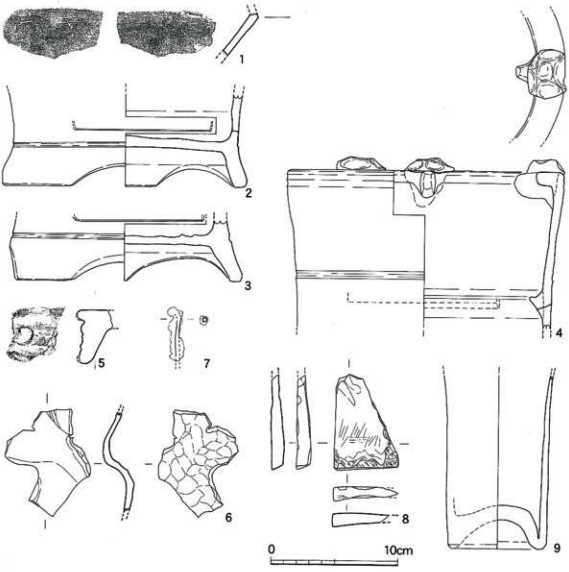
第16図1は胴部が屈曲する縄文土器の深鉢で、後期末から晩期初頭のもの。2～4は土師質土器の焜炉である。5は軒平瓦で、古代のものか。6は土師質の土人形の破片。詳細は不明だが内面には型押しの指頭圧痕が顕著に残る。胎土には多量の滑石を含むことから北部九州産と考えられる。博多人形であろうか。7は鉄釘、8は砥石である。9は暗緑色ガラス製のワインボトルである。底部が歪で内部に気泡を含むことから近代のものであろう。

整理の都合上陶磁器類は図示しなかったが、その一部を図版5に掲載する。

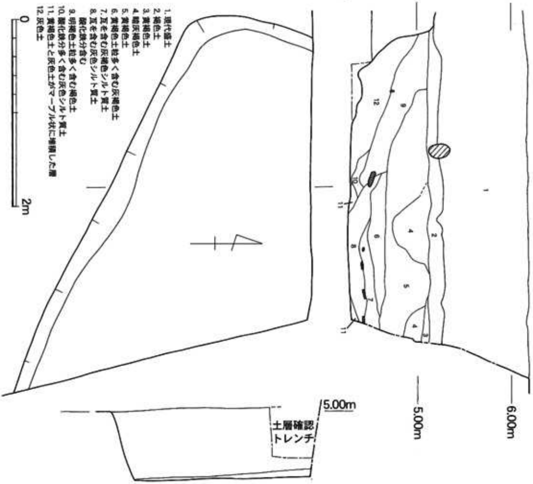


第15図　SK20実測図

図版5上段はSK20から出土した近世・近代陶磁器である。器種構成は肥前系の染付磁器碗、皿類や小坏、瀬戸美濃系の磁器皿、陶器類では鉢や灯明皿、ひょうそく、壷、関西系の土瓶等が認められる。磁器の小碗の中には高台内に「大日本亀山製」の銘款を持つものがあり、肥前系の亀山焼であることを示している。遺物の年代観としては、18世紀代から近代のものがほとんどであろう。



第16図　SK20出土遺物実測図



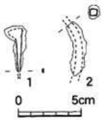
第 17 図　SK21 実測図

SK21（第 17 図）

C1 区で検出した土坑で、一部を確認しただけであり全体の規模は明らかにできない。埋土中から須恵器や土師器、鉄製品とともに近現代の陶磁器や多量の瓦が出土している。SK21 は後述の SD22 にも掘り込んでおり、出土した須恵器や土師器は SD22 と接合関係が認められた。

SK21 出土遺物

第 18 図 1・2 は鉄製品で、いずれも釘である。



第 18 図　SK21 出土遺物実測図

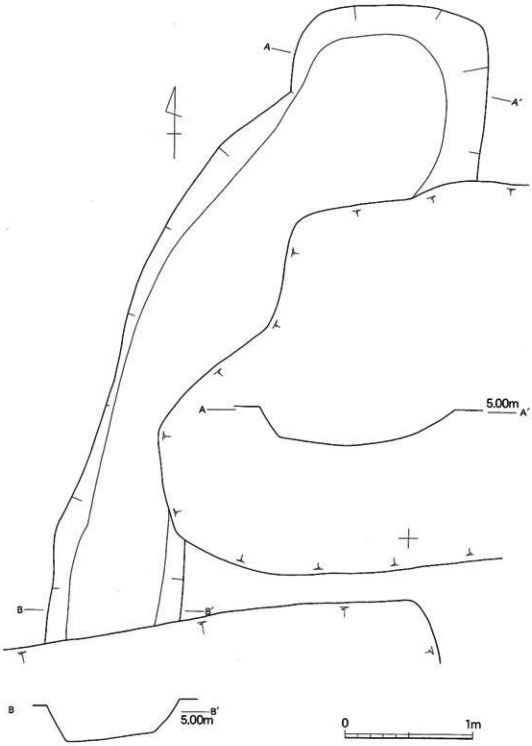
SD23（第 19 図）

C2・3 区で検出した溝状遺構である。旧管理棟基礎の撹乱により全体の規模は明らかにできないが、幅約 1.1 ～ 1.6 mを測る。埋土中は多量の炭を含む灰褐色土で、多量の瓦とともに近世・近代の陶磁器や土師器、瓦質土器が出土している。

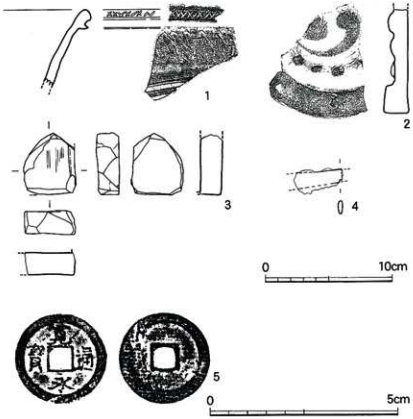
SD23 出土遺物

第 20 図 1 は須恵器甕で、外面に櫛描波状文、口縁端部には波状文原体による斜格子状の刺突を施す。2 は軒丸瓦で、瓦当面に巴文と連珠文を施す。3 は砥石、4 は鉄製品で、断面形状から刃物であろう。5 は寛永通寳で新寛永銭である。

その他、陶磁器等を図版 6 に掲載する。図版 6 上段は SD23 から出土した近世、近代陶磁器類である。器種構成は染付磁器碗、皿類、碗や合子等の蓋、陶器の鉢や土瓶等からなる。碗では型紙摺絵のもの等近代のものが多く、SD23 か



第 19 図　SD23 実測図



第 20 図　SD23 出土遺物実測図

らは近世に属するものは比較的少ないようである。図版 6 の中段は瓦質土器の竈である。全体は長方形を呈すると考えられ、側辺は中空に作る。上面には釜を据えるための円形の孔を 2 箇所に持つ。また、側面には「八吉」の刻印を施す（図版 6 中段右）。その他、SK2 と同様の土師質の甕が数個体出土している。

SK7（第 21 図）

F2 区で検出した土坑である。平面円形を呈し、長辺 1.1 m、短辺 0.95 m を測る。深さは約 0.2 m で、底面中央が若干盛り上がる。埋土は灰褐色土で、砂礫を多く含み粘性は弱い。図示できるような遺物は出土しなかった。

SK29（第 22 図）

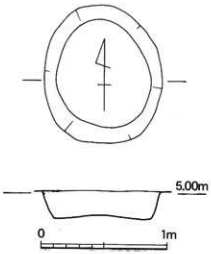
C1 区で検出した土坑である。第 3 層掘削時に陶器の徳利 2 点が並んだ状態で出土したため、周囲を精査してプランを確認している。したがって、本来は第 3 層の上面から掘り込む遺構である。平面方形を呈し、確認面で長辺 75cm、短辺 64cm を測る。徳利を埋納した遺構であろう。

SK29 出土遺物

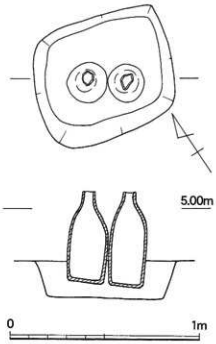
第 23 図は施釉陶器の徳利で、いずれも口縁端部を欠いている。底面から直に立ち上がり肩部は内傾する。底面には回転糸切り痕が残る。

SK30（第 24 図）

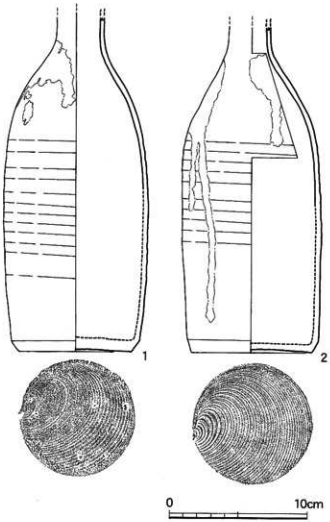
D2 区で検出した土坑である。第 3 層掘削中に磁器皿と小坏が出土したため、周囲を精査してプランを確認したもので、本来は 3 層の上面から掘り込まれた遺構である。検出レベルで長片約 0.2 m、短辺約 0.15 m を測る。埋土は灰褐色のシ



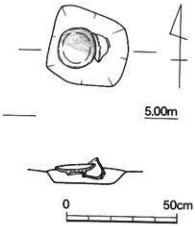
第 21 図　SK7 実測図



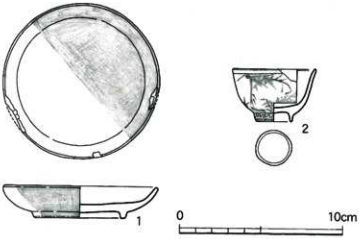
第 22 図　SK29 実測図



第 23 図　SK29 出土遺物実測図



第 24 図　SK30 実測図



第 25 図　SK30 出土遺物実測図

ルト質土である。磁器皿と小坏を埋納した遺構と考えられる。

SK30 出土遺物

第 25 図 1 は磁器皿で、白色釉と褐色釉を半分ずつ掛け分けている。2 は染付磁器の小坏で、口縁は外反する。いずれも幕末から明治頃の製品であろうか。

2．第 5 層上面の遺構

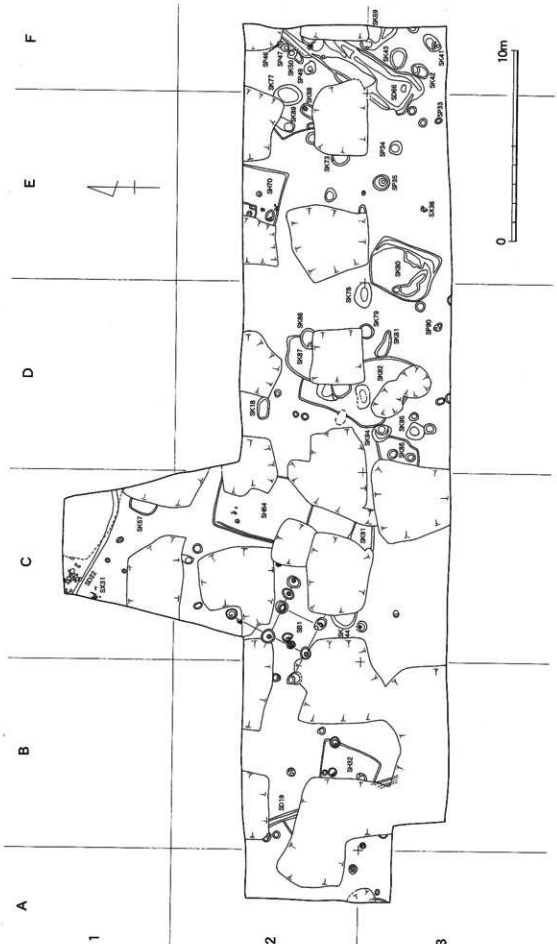
第 3 層及び第 4 層を掘り下げ、基盤層と判断した第 5 層の上面で遺構検出を行ったところ、調査区の全域で弥生時代～古代の遺構を確認できた（第 26 図）。遺構としては弥生時代後期の竪穴住居 SH32 とそれに関連する土器集中部 SX16・SX17、古墳時代の竪穴住居 SH64・SH70、掘立柱建物 SB1、土坑、古代の竪穴遺構 SK80、土坑、溝 SD66、詳細な時期不明の土坑や集石、溝等がある。

(1) 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構

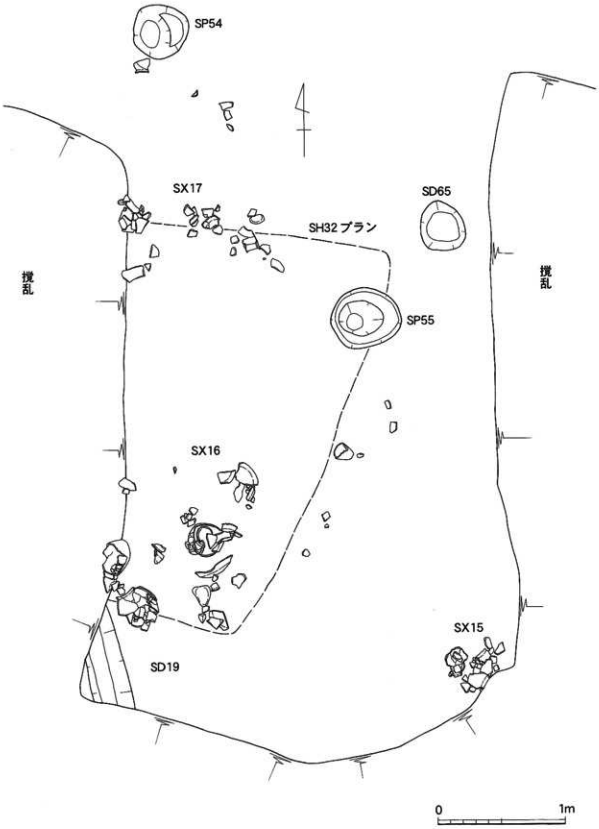
SX15・SX16・SX17・SH32（第 27 図）

当時期の遺構としては、B2・B3 区で検出した竪穴住居 1 棟と、3 箇所の土器集中部がある。B2・B3 区の 3 層を除去している途中で土器が集中して出土する部分が 3 箇所あったため、まとまりごとに遺構番号を付けた（SX15 ～ SX17）。土器集中部の周辺を精査して掘り込みの有無を確認したが、明確な掘り込みは認められなかった。これらの土器群を取り上げた後、引き続き 4 層を除去していくと、再び弥生土器の集中が認められた。また、竪穴住居と思われる方形のプランが確認できたため、これらを住居に伴う土器群として取り扱った。したがって SX15 ～ 17 と SH32 の遺物群には若干のレベル差が存在するが、SX16・SX17 の分布範囲は竪穴住居の範囲と重なるため、両者の関係性は高いものと判断される。SX15 は竪穴住居から約 1.5 m離れた位置にあり、かつ遺物も時期差があるため直接の関係は無い。

以下、各集中部ごとに報告する。



第 26 図　高畑遺跡遺構配置図（第 2 面）



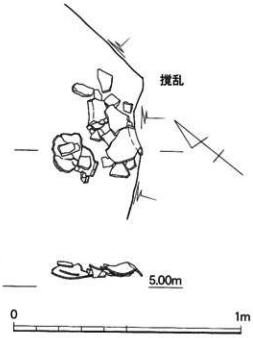
第 27 図　SX15・SX16・SX17 実測図

SX15（第 28 図）

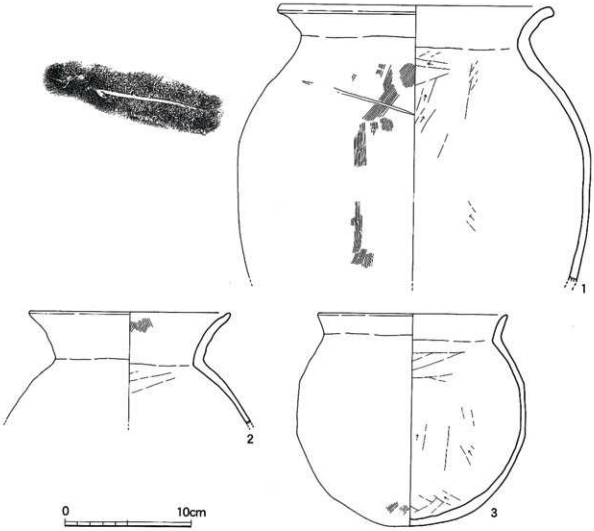
B3 区で検出した土器集中部である。旧管理棟基礎の撹乱を受けるが、東西、南北方向とも約 50cm の範囲に数個体の土器が固まって出土している。検出標高は約 5.1 m である。遺物は古墳時代初頭頃の土師器からなる。

SX15 出土遺物

第 29 図 1 ～ 3 は 2 は土師器の甕で、いずれも内面はケズリ調整を施す。1 は口縁の外反が強く、肩部にはヘラ状の線刻がある。2 は口縁端部を若干上方へつまみ上げる。3 は体部が球形で、口縁端部は先尖りとなる。器形や調整から、いずれも古墳時代初頭のものである。



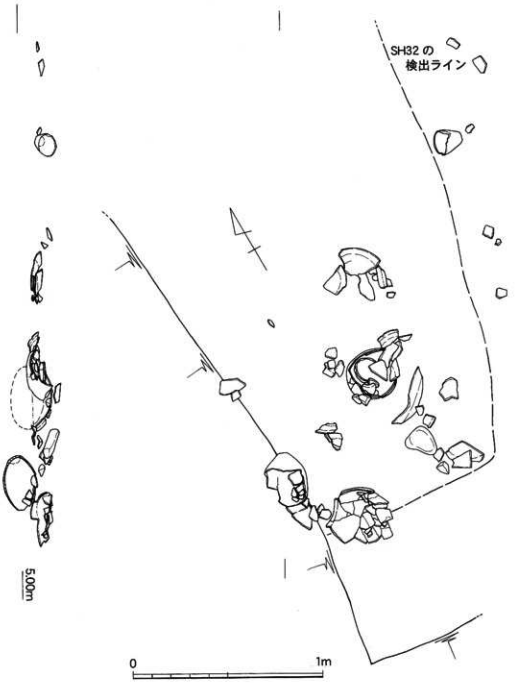
第 28 図　SX15 実測図



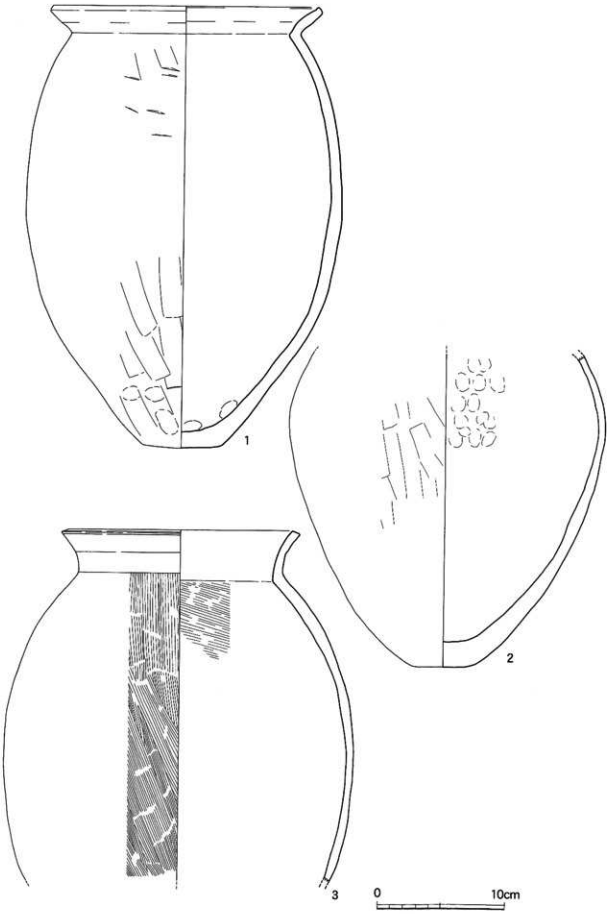
第 29 図　SX15 出土遺物実測図

SX16（第 30 図）

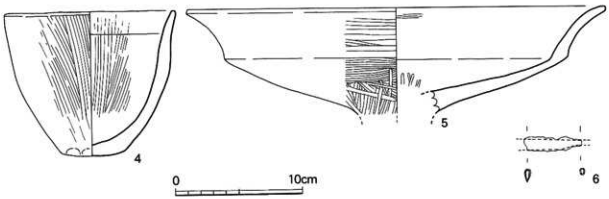
B2・B3 区で検出した土器集中部で、その分布範囲は後述の SH32 の南半部にあたる。特に SH32 の範囲内で残りのよい個体が出土している。検出標高は約 5.1 ～ 5.2 mを測る。遺物は弥生土器、鉄器が出土しており、SH32 と接合関係が認められるものもあることから、本来は SH32 に伴うものと考えられる。



第 30 図　SX16 実測図



第 31 図　SX16 出土遺物実測図（1）



第 32 図　SX16 出土遺物実測図（2）

SX16 出土遺物

第 31 図 1 ～ 3 は弥生土器の甕である。1 は口縁部が外反し、端部は若干上方に延びる。外面は板ナデ調整、内面はナデ調整で、底部際に指頭圧痕が残る。底部はやや丸みを持つ平底である。2 は頸部から口縁部を欠くが、1 とほぼ同様の器形であろう。外面は板ナデ調整を施し、胴部最大径部の内面には指頭圧痕が 5 段にわたり顕著に認められる。底部は 1 と同様に丸みを持つ平底である。3 は口縁が緩く外反する甕で、口縁端部には面を持つ。外面には縦位のハケ目調整、内面は頸部以下に斜位のハケ目調整を施す。

第 32 図 4 は小型の壺形土器で、口縁部は緩やかに外に開き、端部は丸くおさめる。胴部の膨らみは弱く、口径よりも小さいため、甕状の器形を呈し、平底の底部に至る。調整は内外面ともに縦位のハケ目調整を施す。5 は高坏で、脚部を欠くが坏部は外に開き、頸部で屈曲して口縁部は強く外反する。口縁端部は丸みを持つ。調整は外面にはヘラミガキを密に施し、内面はわずかながらヘラミガキの痕跡が観察できる。6 は鉄製品で、断面形状は下方が薄くなることから刃物と考えられる。

以上の土器類については、弥生時代後期後葉に比定でき、後述する SH32 からの出土遺物とほぼ同時期と考えられる。

SX17（第 33 図）

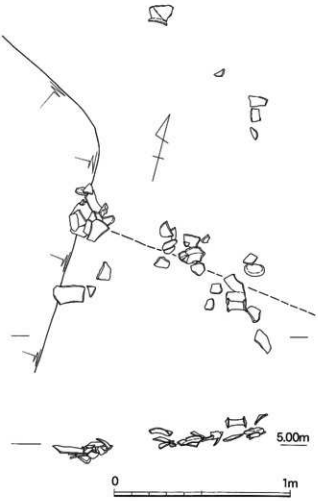
B2 区で検出した弥生土器の集中部で、その分布範囲は一部を除き後述の SH32 の北端部にあたる。検出標高は約 5.0 ～ 5.2 m を測る。先述の SX16 は大破片が多く認められたが、SX17 は比較的小振りのもので構成される。

SX17 出土遺物

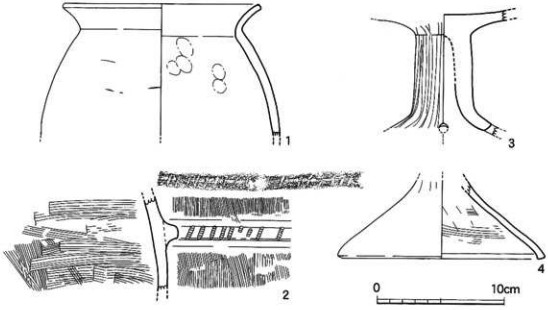
第 34 図 1 は弥生土器の甕である。2 は壺の体部片で、断面台形状の凸帯を貼り付け、凸帯上にはハケ目原体による列点文を施す。内外面ともハケ目調整を密に施す。3･4 は高坏で、3 は脚部外面にミガキを施し、円形の孔が認められる。4 は基部が開き、内面にハケ調整を施す。

SH32（第 35 図）

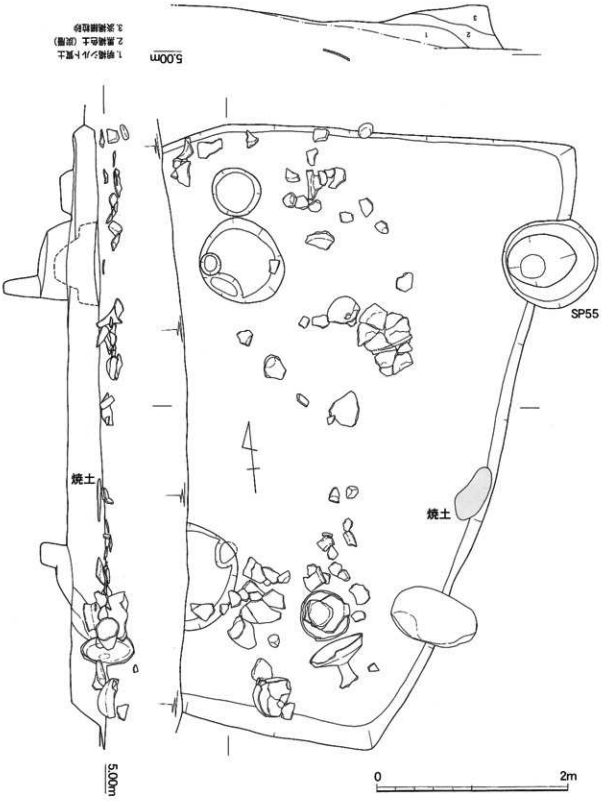
B2・B3 区で検出した土器集中部の下位で確認できた竪穴住居である。検出標高は約住居のプランで約 5.0 m、土器集中部は約 5.1 m を測る。西半は旧管理棟基礎等の撹乱を受けているが平面形状は 1 辺約 3.3 m の方形を呈する。埋土は炭を含む明褐色土、黒褐色の炭層、淡褐色の細粒砂層の堆積が確認でき、東側の壁際には焼土の集中する箇所がある。床面には 3 基のピットが確認できたが、貼床は認められなかった。本遺構からは多量の弥生土器が出土しているが、これらの多くは床面から浮いた状態であることから住居廃絶後の祭祀に伴うものと考えられる。土器は SX16 のすぐ下位から出土しており、両者には接合関係も認められることから本来は一体のものと考えられる。



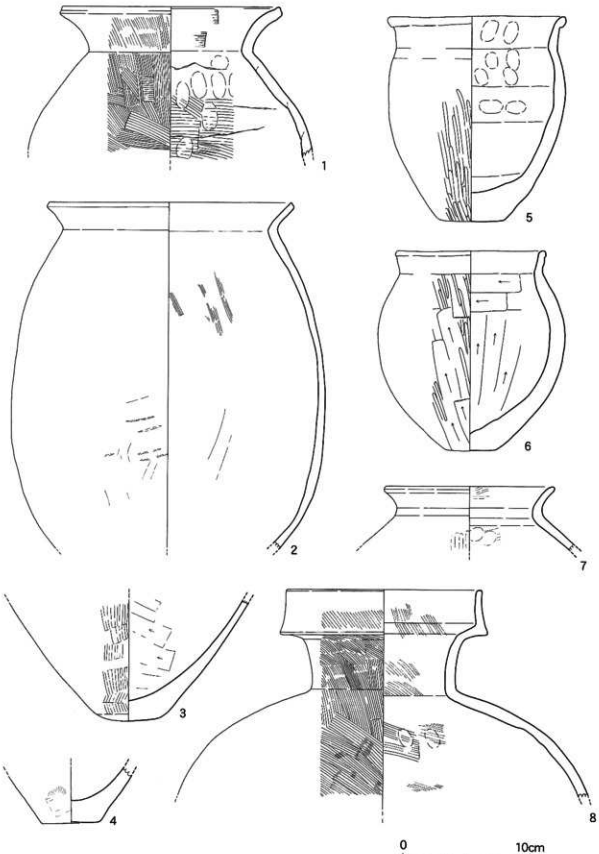
第 33 図　SX17 実測図



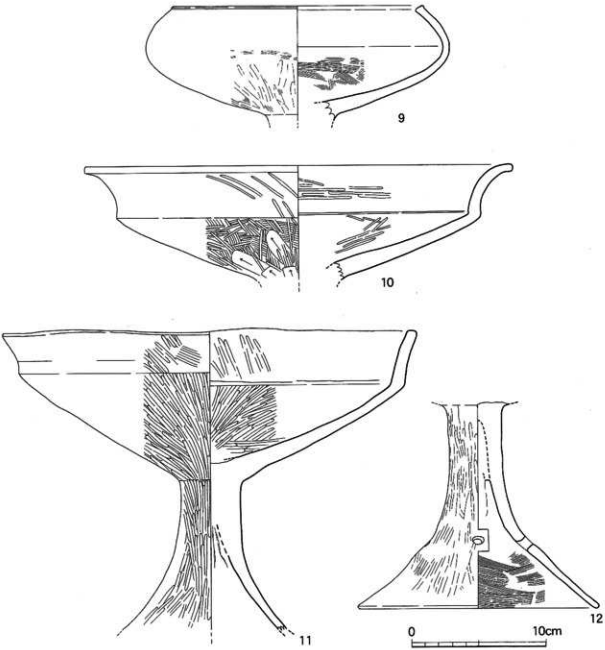
第 34 図　SX17 出土遺物実測図



第 35 図　SH32 実測図



第 36 図　SH32 出土遺物実測図（1）



第 37 図　SH32 出土遺物実測図（2）

SH32 出土遺物

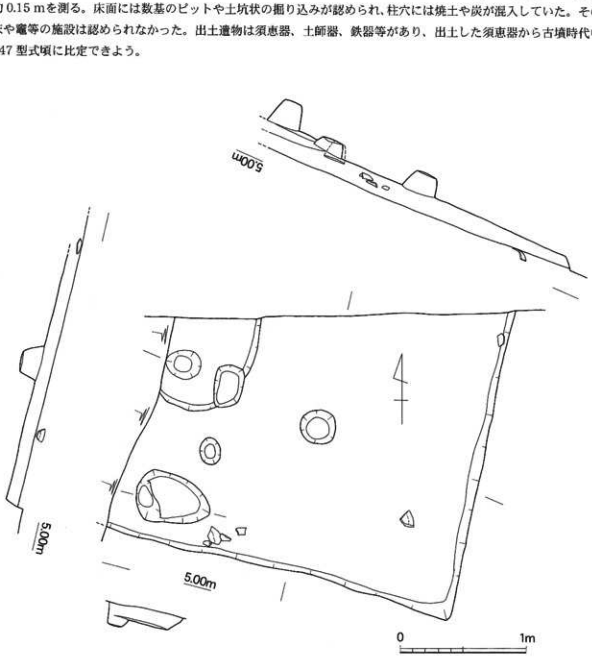
第 36 図 1 ～ 4 は弥生土器の甕である。1・2 は口縁が「く」字状に外反し、端部は面を持つ。1 は内外面ともハケ目調整を密に施す。3・4 は平底の底部破片で、小さな平底である。5・6 は小型の壺形土器で、外面に粗いミガキを施す。口縁端部は若干折り返して玉縁状に作る。7 は口径に対し胴部が開く器形で、外面にミガキを施す点から壺であろう。8 は複合口縁の壺で、胴部は大きく開く。口縁部外面はハケ調整を施し、波状文等は認められない。第 37 図 9 ～ 12 は高坏である。9 は口縁が強く内湾する器形で、豊前地方のものである。10・11 は坏部が外に開き、口縁部が外反するもので、10 は外反が強い。11 は脚部の端部周縁を欠くが坏部はほぼ完形である。内外面ともミガキを密に施す。12 は脚部で、坏との接合部から端部にかけて緩やかに開く。調整は外面がミガキ、内面はハケ目調整を施す。

(2) 古墳時代の遺構

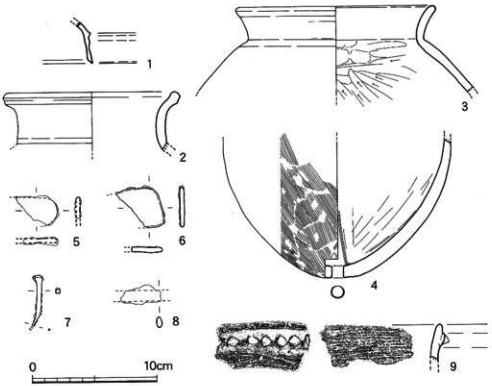
古墳時代の遺構としては、2基の竪穴住居SH70・SH64や総柱の掘立柱建物SB1の他、土器集中部SX31や土坑SK77・82・87等がある。竪穴住居のうち、SH64は貼り床や主柱穴が認められず、竪穴住居である確証は得られなかったが、壁溝の存在から竪穴住居と判断した。SH64・SH70ともに竈は確認されなかった。土坑SK82は規模が大きいが、形状は不整形で性格は不明である。これらの遺構の年代観は、出土遺物から概ね古墳時代後期頃に該当しよう。

SH70（第38図）

E2区で検出した竪穴住居の可能性がある遺構である。方形の平面形状を呈するが、西側は旧管理棟基礎の攪乱を受け、北側は調査区外へ続くため全体の規模は明らかにできない。確認した範囲で長辺2.9 m以上、短辺2.6 m以上、深さ約0.15 mを測る。床面には数基のピットや土坑状の掘り込みが認められ、柱穴には焼土や炭が混入していた。その他、貼床や竈等の施設は認められなかった。出土遺物は須恵器、土師器、鉄器等があり、出土した須恵器から古墳時代中期、TK47型式頃に比定できよう。



第38図　SH70実測図



第 39 図　SH70 出土遺物実測図

SH70 出土遺物

第 39 図 1 は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の間の稜は鋭く、口縁端部の面には沈線を持つ特徴から TK47 型式に比定できる。2 は須恵器の甕で、口縁部は丸く肥厚し、外面に段を持つ。3 は土師器の甕で、口縁は外反し端部は丸い。内面はケズリを密に施す。4 は底部には焼成前の穿孔を持つ土師器の甕で、胴部は丸い。5 ～ 8 は鉄製品で、5・6 は用途不明で板状を呈する。7 は釘で、8 は刃物であろうか。9 は縄文晩期の凸帯文土器[注3]で、口縁のやや下に断面三角形の刻み目凸帯を持つ。口縁端部は丸くおさめる。

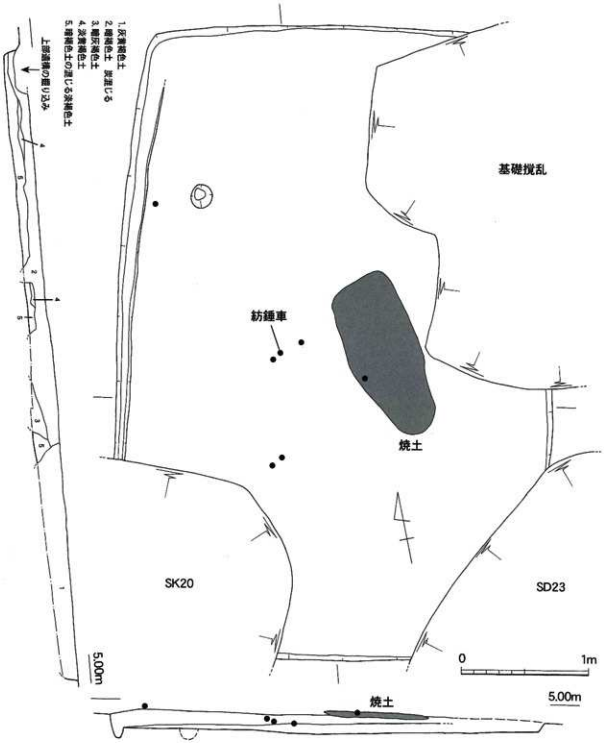
SH64（第 40 図）

C2・D2 区で検出した遺構で、3 層掘削中に焼土の広がりが確認できたため周辺を精査したところ、長方形のプランが確認できた。南東・南西部には旧管理棟基礎の攪乱、北西端は SK20 の掘り込みを受ける。長辺約 5 m、短辺約 3.5 m、深さ約 0.2 m で、検出標高は約 4.9 m を測る。底面にはピット 1 基が確認できたが、貼床は認められない。また、北側の壁際で溝状の掘り込みが確認できたため、竪穴住居と判断したが、明確な主柱穴がなく断定できない。出土遺物は須恵器、土師器、紡錘車があり、古墳時代後期の遺構と考えられる。

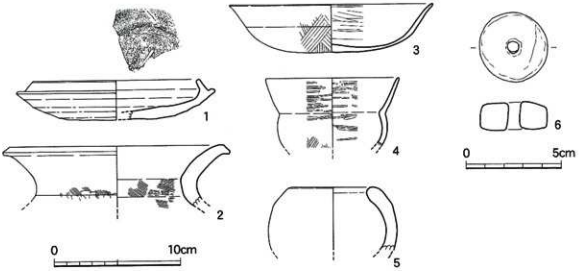
SH64 出土遺物

第 41 図 1 は須恵器の坏で、器高は低く、受け部から口縁までは短く内傾する。2 ～ 5 は土師器で、2 の甕は口縁が外反し、端部は外側に延びる。3 は薄手の鉢で、底面は丸い。SK87 から出土した破片と接合している。4 は小型丸底壺で、内外面に粗いヘラミガキを施す。5 は蛸壺で、口縁は内湾する。6 は滑石製の紡錘車で、全体を研磨して成形し、中央に直径 6mm の孔を穿つ。

註 3）凸帯文土器については近年弥生時代早期に位置づける見解も出されている。ただし、今回の高畑遺跡の調査では縄文時代晩期の土器は出土しているが弥生時代前期の遺物は認められず、弥生時代への継続性を欠くことから縄文晩期として扱う。



第 40 図　SH64 実測図



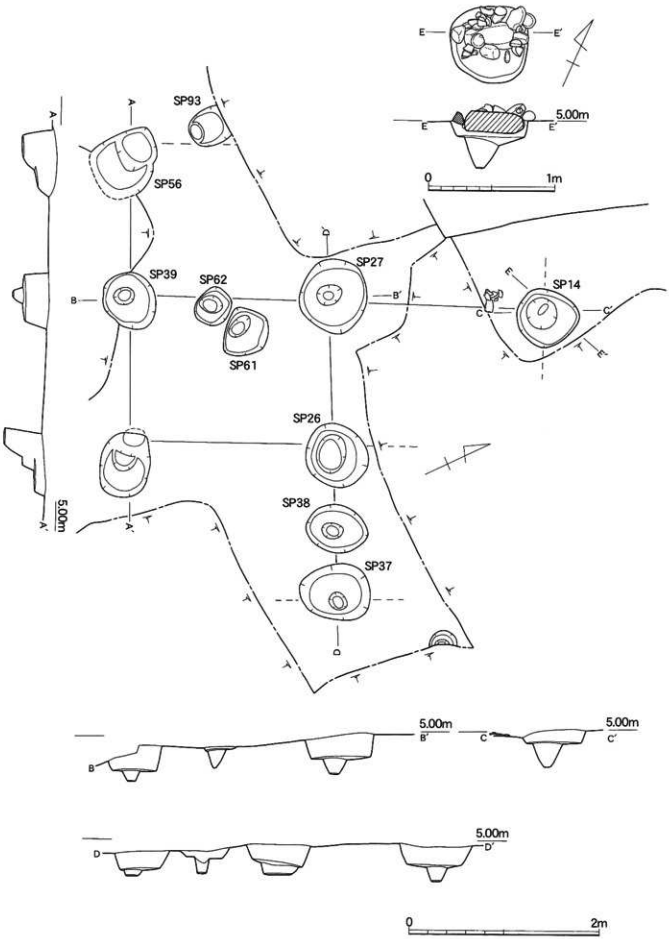
第 41 図　SH64 出土遺物実測図

SB1（第 42 図）

C2 区で検出した総柱の掘立柱建物で、SP14・26・27・37・39・45・56 から構成される。旧管理棟基礎の攪乱のため全体の規模は不明確だが桁行 3 間、梁行 2 間を確認している。柱間の距離は東西は約 1.2 m、南北は約 1.6 mを測り、東西軸は北から 67 度西に振る。検出標高は約 5.0 mである。SP14 は検出面で礫の集中が認められ、中心に礎石状の大石が置かれていた。柱穴の基本的な埋土は黄褐色土粒混じりの暗褐色土ないし褐色土で、少量の炭を含む。周囲にも構造の似た柱穴が複数分布することから、建替えの可能性も考えられる。出土遺物は少ないながら須恵器、土師器があり、古墳時代後期以降の遺構である。

SB1 出土遺物

第 43 図 1 は須恵器の坏である。口縁部が短く、底部のヘラケズリ範囲も狭い特徴から TK209 型式に比定できよう。見込みには当て具痕が認められる。2 は土師器の小壺で口縁部を欠く。底部は周縁が扁平な高台状を呈し、中央は凹む。内面はユビナデ痕が明瞭に観察され、下方から上方へナデ上げている。



第 42 図　SB1 実測図

SX31（第44図）

C1区で検出した土器集中部である。検出標高は約5.0～5.05mで、西から東へ傾斜した状態で出土している。出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器がある。

SX31 出土遺物

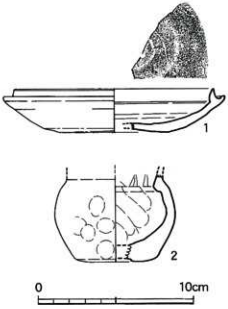
第45図1は須恵器の坏蓋で、口縁部と天井部を分ける稜は鋭く、口縁端部は内傾し端面に沈線を施す。TK47型式に比定できる。2・3は弥生時代後期の壺であろう。2は胴部が口径以上に広がる。3は底面を欠損するが凹み底で、内外面ともにミガキ調整を施す。4は土師器の鉢で、口縁部は若干内傾し端部は先尖りとなる。

SK77・88・89（第46図）

F2区で検出した楕円形の土坑である。土坑SK88・89、ピットSP71・72が近接して存在する。SK77は平面楕円形で、長辺約1.6m、短辺約1.1m、深さ約0.25mを測る。SK89は隅丸長方形状で、長辺0.9m以上、短辺約0.6m、深さ約0.2mを測る。SK88は長辺0.65m以上、短辺約0.6m、深さ約0.5mを測る。北側には浅いピット状の掘り込みが認められた。SK89のすぐ西で約5cmの段状の落ち込みが確認できたが、これらの遺構との関係は明らかにできなかった。出土遺物は少ないが、SK77、SK89から土師器や石器、縄文土器等が出土している。これらの遺構の埋土はいずれも灰褐色系のシルト質土であり、その点からSK77と同様に古墳時代頃と判断する。

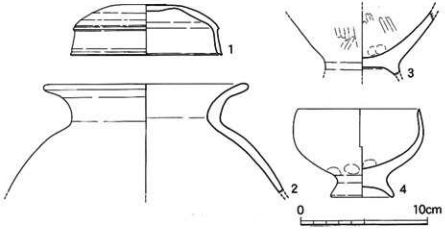
SK77・89 出土遺物

第47図1は土師器の甕である。口縁は「く」字状に外反し、端部は面を持つ。2は土師器の鉢で、口縁端部は若干外反し底面は丸い。3は縄文土器の深鉢で体部が屈曲する。後期末～晩期初頭頃か。4は蛇紋岩製の石器で、周縁を欠損するが表面に擦痕が確認でき、磨製石斧等の可能性があろう。5はSK89から出土した縄文土器の小片で、図示できるのはこの1点だけである。

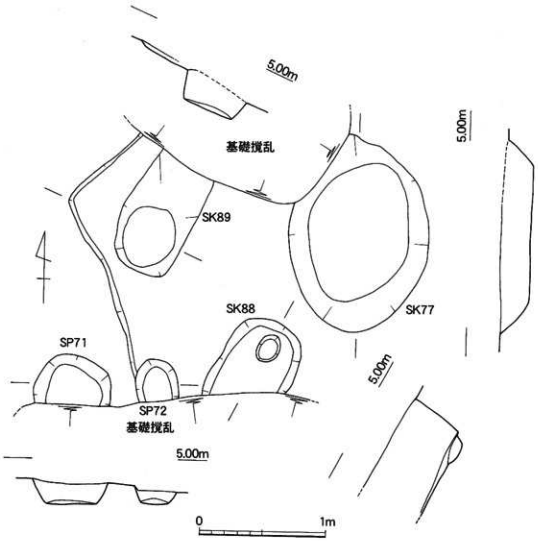


第43図　SB1出土遺物実測図

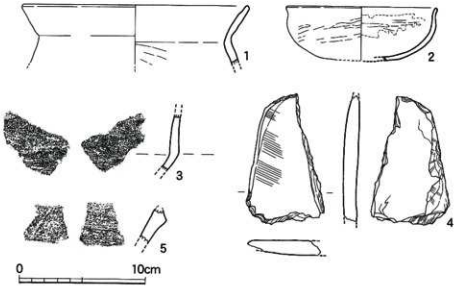
第44図　SX31実測図



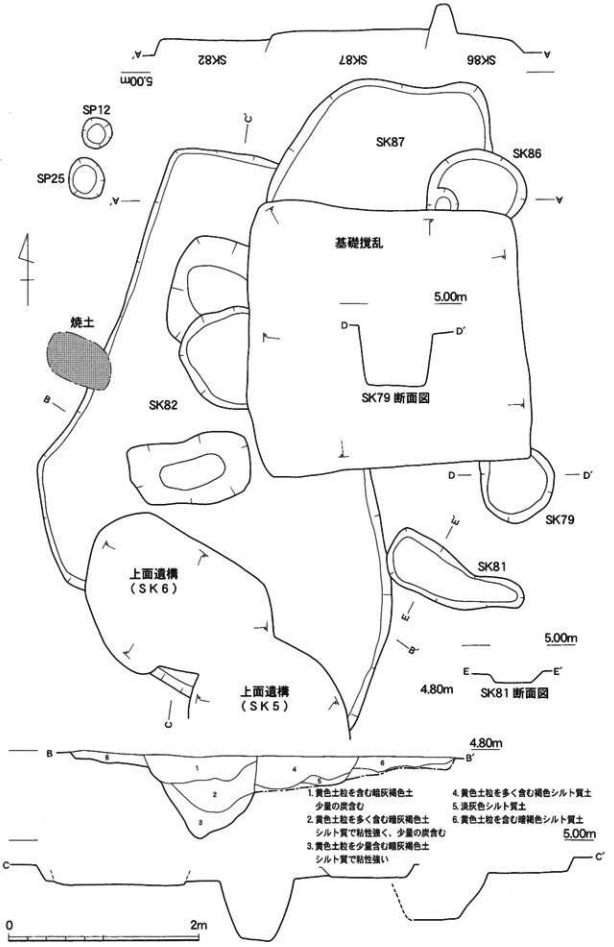
第45図　SX31出土遺物実測図



第 46 図　SK77・SK88・SK89・SP71・SP72 実測図



第 47 図　SK77・SK89 出土遺物実測図



第 48 図　SK79・SK81・SK82・SK86・SK87 実測図

SK82・86・87・79・81（第48図）

D2・3区で検出した不整形の土坑である。SK82は旧管理棟基礎及び上面遺構のSK5・6の撹乱を受け、SK81・87に切られる。西側壁際には焼土の広がりが認められるが、遺構掘り方の検出面からは若干浮いていた。内部には複数の土坑状の掘り込みがあるが、土層観察の結果検出面から掘り込むものであり、複数の土坑が複雑に重複した結果形成された遺構と考えられる。正確な規模は不明確だが東西約3.6 m、南北5.8 m以上、深さは最大で約0.9 mを測る。

SK86はSK87を切る土坑で、平面円形を呈し、直径約1.1 m、深さ約0.5 mを測る。西側は底面にピット状の掘り込みを伴う。

SK87はSK82の北東端にある不整形の土坑である。南側は旧管理棟基礎の撹乱を受け、東側はSK86に切られるが、SK82よりは新しい。正確な規模は不明だが東西約2.1 m、南北1.4 m以上、深さ約0.2 mを測る。

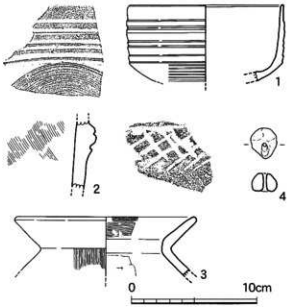
SK79はSK82の約1 m東で検出した土坑である。平面円形で、直径約0.8 m、深さ約0.6 mを測る。埋土中から縄文土器が出土している。

SK82 出土遺物

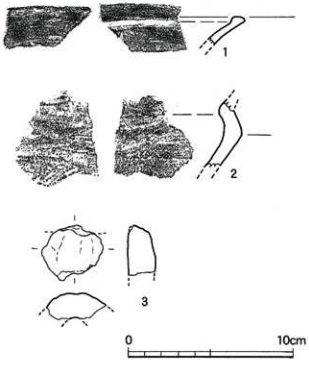
第49図1は須恵器高坏か。外面には数条の段があり、底面にはカキ目が認められる。2は土師器壺の凸帯部の破片で、凸帯上には斜格子の刻みを施す。3は土師器の甕で、口縁は強く外反し、端部は面を持つ。4は手捏ねの土師質土玉で、中央に直径1mmの焼成前穿孔がある。

SK79・87 出土遺物

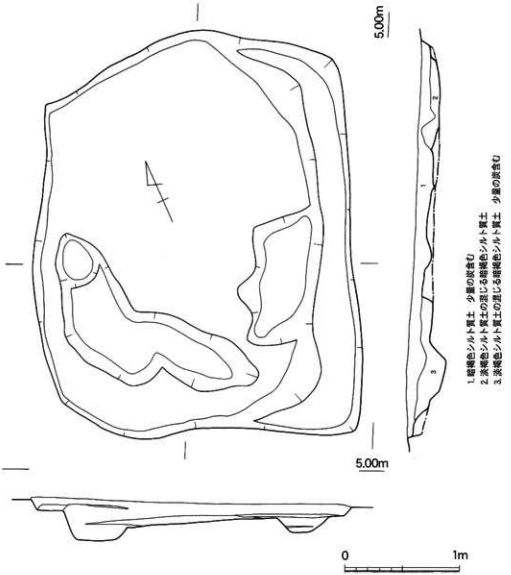
第50図1・2はSK79から出土した縄文土器で、1は口縁部が肥厚し内面に段を持つ晩期前半の浅鉢。2は胴部が屈曲する深鉢で後期末から晩期のものである。3はSK87から出土した土師質の輪羽口の破片で、全体に被熱し赤変する。この他にSH64から出土した鉢と接合する破片がある（第41図3）。



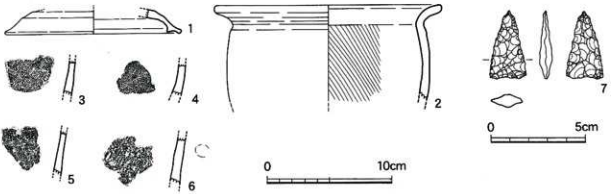
第49図　SK82出土遺物実測図



第50図　SK79・SK87出土遺物実測図



第 51 図　SK80 実測図



第 52 図　SK80 出土遺物実測図

(3) 古代の遺構

古代に属する遺構としては、性格不明の方形竪穴状遺構 SK80、内部に礫を充填した土坑 SK18、溝状遺構 SD22 及び溝 SD66 等がある。SD66 と、その周囲に存在する土坑 SK43 が 10 世紀後半頃の年代が与えられる他は、概ね 8 世紀頃の遺構である。

SK80（第 51 図）

D-3・E-3 区で検出した竪穴状遺構である。平面はやや歪な方形を呈し、長辺約 3.5 m、短辺約 2.8 mを測る。東壁際がステップ状に一段高くなっており、底面には 2 ヶ所に不整形の掘り込みがあるが、柱穴や貼床層等は認められなかった。遺物は土師器や須恵器、製塩土器等が出土しており、7 世紀後半～ 8 世紀前半に位置づけれらるが、遺構の性格は不明である。

SK80 出土遺物

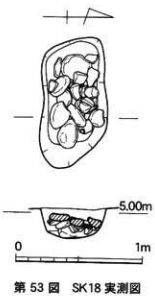
第 52 図 1 は須恵器の坏蓋で、天井部はヘラケズリを施し、口縁部には返しを持つ。7 世紀後半～ 8 世紀前半に位置づけられよう。2 は土師器の甕で、口縁部は外反し端部は丸い。内面にはハケ調整を施す。3 ～ 6 は製塩土器の破片で、3 ～ 5 は内面に布目痕が明瞭に残る。7 は平基無茎式の打製石鏃で、石材は姫島産黒曜石である。

SK18（第 53 図）

D2 区で検出した土坑である。長辺約 1 m、短辺約 0.5 m、深度約 0.25 mを測る。埋土は暗褐灰色シルト質土で、少量の炭を含む。内部には 20 ～ 30cm 大の礫を詰め込んでいる。礫に混じって須恵器や土師器が出土しており、出土遺物から 8 世紀前半の遺構と考えられる。

SK18 出土遺物

第 54 図 1 は須恵器の坏蓋である。口縁端部は若干内側に折れ、天井部にはやや扁平な宝珠形のつまみを持つ。MT21 型式併行に該当しよう。2 は高台のついた底部で、壺であろうか。3 は土師器の甕で、頸部から口縁にかけてなだらかに外反し、口縁端部は丸い。



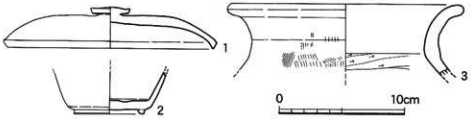
第 53 図　SK18 実測図

SD22（第 55 図）

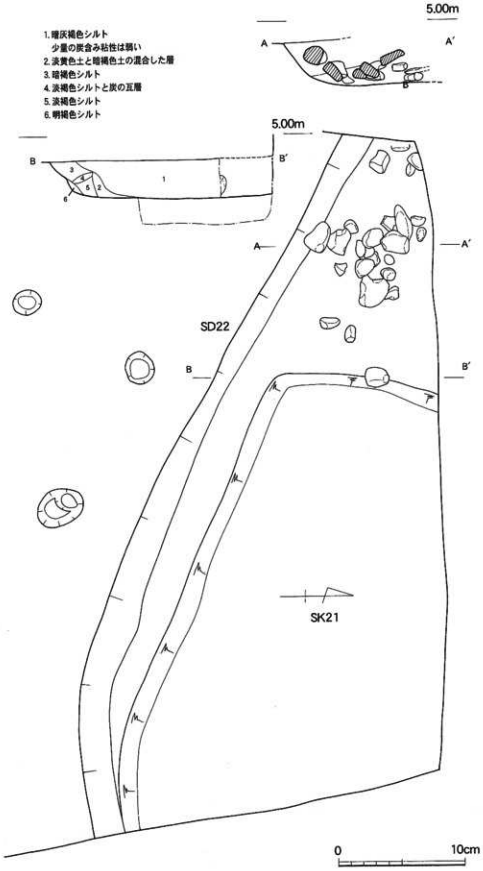
C1 区で検出した溝状遺構である。北、東、西は調査区外に続くため、全体の規模は明らかにできない。また、東側の大半は近代の土坑 SK21 によって切られている。埋土は暗灰褐色シルト質土が主体で、西端部では埋土中から礫がまとまって出土しているが、人為的な施設ではない。遺物は土師器、須恵器、土錘等があり、概ね 8 世紀代に比定できる。

SD22 出土遺物

第 56 図 1 は須恵器の坏、2 は須恵器の高台付きの壺底部であろう。3 は土師器の鉢で、体部は丸く、口縁部は外反し端部は先尖りである。SK21 から出土した破片と接合している。4 は土師質の管状土錘である。



第 54 図　SK18 出土遺物実測図



第 55 図　SD22 実測図

第 56 図　SD22 出土遺物実測図

SD66（第 57 図）

F2・F3 区を中心に検出した溝である。南西から北東方向に延び、コーナーは丸みを帯びる。長辺 7.4 m以上、幅約 1.6 ～ 2.1 m、深さ約 0.8 ～ 0.9 mを測る。土層断面を観察した結果、複数回にわたって掘り直されていることが分かった。掘り直しは西から東に想定され、1 ～ 3 層が一番新しく、21・22 層が最も古いものと考えられる。溝の下半部は砂層とシルト質土が互層状に堆積している。内部からは多量の遺物が出土しており、古代の土師器の他、瓦や黒色土器、緑釉陶器、白磁が出土している。土師器は坏と小皿があり、底面ヘラ切りと糸切りの双方が認められ、概ね 10 世紀後半頃に位置づけられよう。黒色土器や緑釉陶器もそれに伴うものと思われるが、白磁は若干年代が降り、10 世紀末～ 11 世紀中頃と考えられる。その他、縄文土器や石器も出土したが、これらは混入である。なお、SD66 の北東端部にはピットや土坑 SP46・47・49・SK50 が並んで掘り込んでいるが、溝との関係は明らかにできなかった。

SD66 出土遺物

第 58 図 1 は須恵器の蓋で、頂部に宝珠形のつまみを持つ。2 ～ 18 は土師器の坏・小皿類で、SD66 から主体的に出土したものである。2 は口縁が強く外反し、器高が低い坏である。底面にはヘラ切り痕が認められる。器形から 8 世紀代のものである。3 ～ 7 は底面ヘラ切りの小皿である。3 は口縁が内湾気味に立ち上がり、他は短い口縁が付く。口径 9.0 ～ 10.3cm、器高は 3 は 2.2cm とやや高く、他は 1.05 ～ 1.3cm である。8 ～ 14 は底面ヘラ切りの坏で、8 ～ 12 は口縁が外反し、13・14 はやや内湾気味である。13 は底面に板状圧痕が認められる。口径は 12.8 ～ 16.7cm、器高は 2.8 ～ 3.5cm で、法量に幅がある。15 ～ 18 は底面の切り離しに回転糸切り技法を用いるものである。15 は小皿で、口縁は内湾気味に短く立ち上がる。口径 9.2cm、器高 1.4cm を測る。16 ～ 18 は坏で、いずれも口縁は内湾する。16 は底面に板状圧痕が認められる。法量は口径 13.2 ～ 15.4cm、器高 3.0 ～ 4.1cm を測り、ヘラ切りの坏と同様に法量に差が認められる。

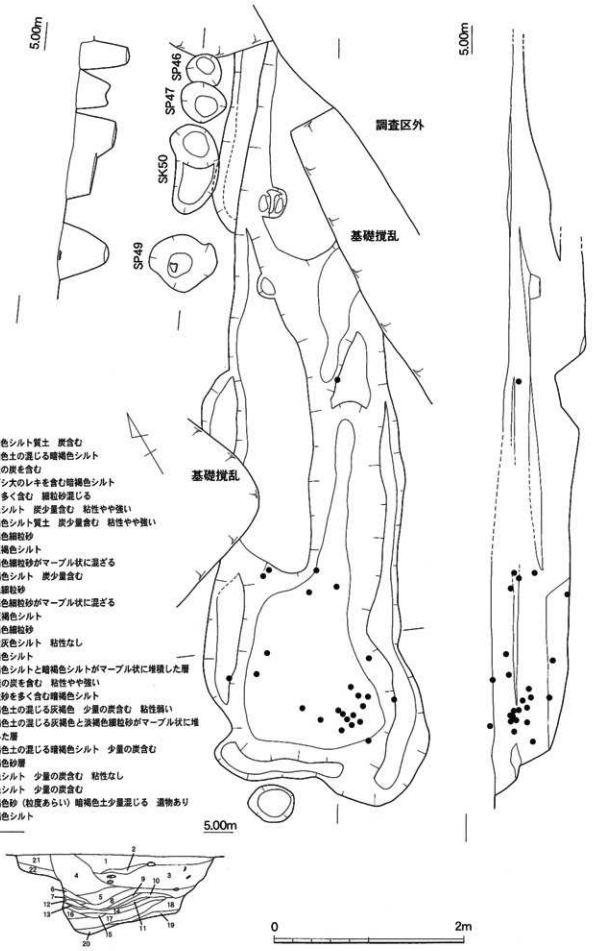
以上の土器類については、一部 8 世紀代の須恵器や土師器を含むが、主体となる土師器小皿や坏の底面処理技法として回転糸切り技法が出現しており、底面ヘラ切りの坏と共存していることから、宇佐弥勒寺編年の SK-5 段階[注4]、概ね 10 世紀後半に該当しよう。ただし、坏類は法量にばらつきがあり、弥勒寺 SK-5 段階では口径が 12.5 ～ 14.0cm に収まるのに対し、この SD66 の坏はそれを上回るものも複数存在する。このことから、次の弥勒寺 SK-3 段階（11 世紀）まで降るものを含む可能性も考えられる。後述する白磁の年代観もそれを示唆しよう。その一方で底面糸切りの坏・小皿は少なく、底面ヘラ切りのものが多い点は古層を示すといえる。

第 59 図はその他の土器・陶磁器類を掲載する。19・20 は黒色土器椀である。いずれも内黒の A 類椀で、内面に暗文を施す。21 は緑釉陶器の底部で、高台を貼り付け、内外面共に緑色釉を施す。22 は白磁皿で、体部の中程で屈曲し口縁に至る。施釉はこの屈曲部のやや下方までで、底部は露胎である。器形から北宋前半期の白磁皿XI 3 類に該当し、10 世紀末～ 11 世紀中頃の年代が与えられる[注5]。23 は土師質焼成の把手状のもので、鍋の把手であろうか。24 は土師質焼成の管状土錘である。25 は平瓦で、凹面には布目痕が残り、凸面には縄目タタキを施す。

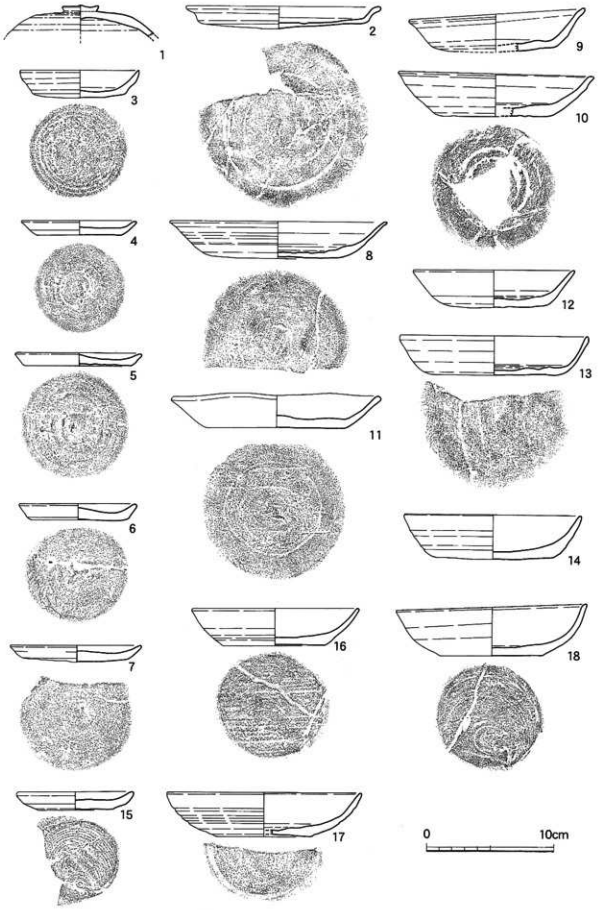
第 60 図は縄文時代の土器、石器類で、混入したものである。26 ～ 28 は口縁が外反し、口縁部の内側には段を持つ深鉢である。29・30 は深鉢の胴部で、29 は外面に粗い条痕を施す。30 は上端の折損面がいわゆる擬口縁となっている。31 ～ 34 は浅鉢である。35 は深鉢の底部で、底面は若干凹む。今回の調査で出土した唯一の底部である。以上の土器については、口縁部や底部の形状から概ね晩期初頭から前葉頃に該当する。ただし、33・34 はそれよりも降るものと

註 4）宮内克己 1989『出土土器の編年』『弥勒寺－宇佐弥勒寺旧境内発掘調査報告書－』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第 7 集

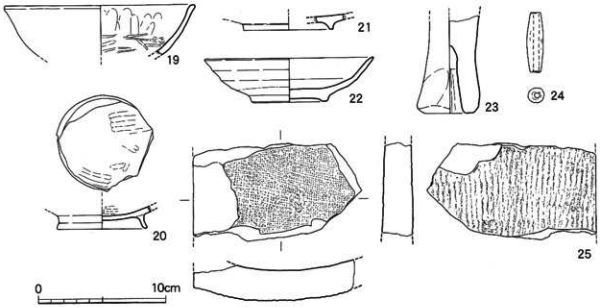
註 5）山本信夫 1988「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究』第 8 号、日本貿易陶磁研究会



第 57 図　SD66 実測図



第 58 図　SD66 出土遺物実測図（1）



第 59 図　SD66 出土遺物実測図（2）

思われる。

36 ～ 39 は石器類である。36 は河原石の円礫を利用した叩石で、上下両面と周縁に敲打痕が認められる。37 ～ 39 は剥片石器で、37・38 は平基式無茎石鏃である。37 は先端部を欠損するが、いずれも二等辺三角形状を呈する。石材はガラス質安山岩である。39 は剥片の一辺に刃部を付けたスクレイパーである。刃部の対辺には原礫面が残る。石材はガラス質安山岩である。

(4) その他の遺構

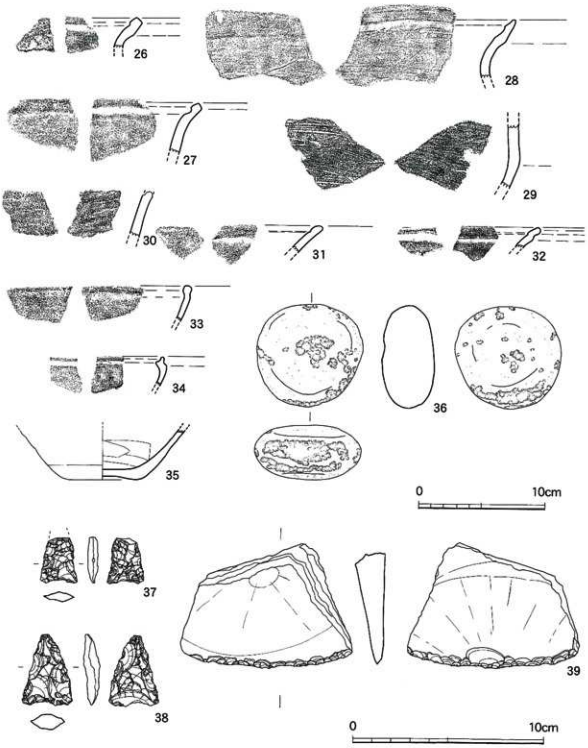
ここでは詳細な時期が不明の遺構を取り上げる。遺構としては溝、土坑、集石、ピットがある。なお、ピットは実測可能な遺物が出土したものを中心に扱う。

SK41 ～ 43・SK69（第 61 図）

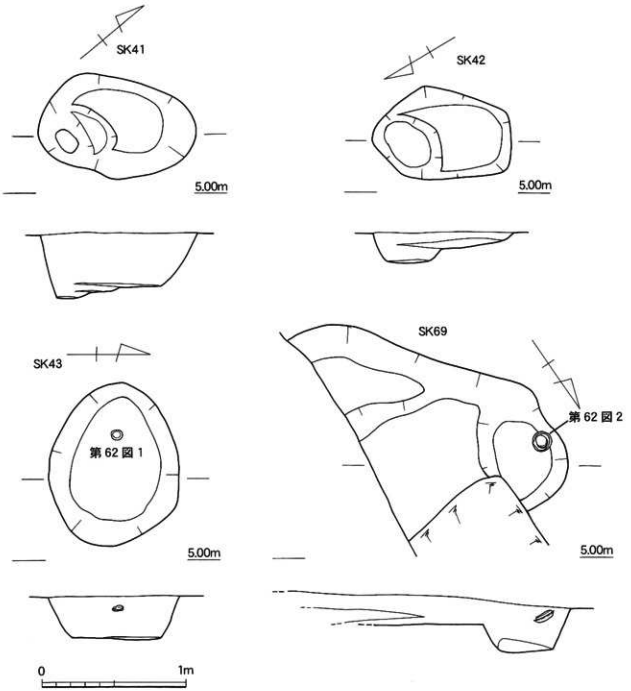
F2・F3 区で検出した土坑群である。SK41 は楕円形状の平面形で、長辺約 1.1 m、短辺約 0.7 m、深さ約 0.45 mを測る。埋土は灰褐色シルト質土で、少量の炭を含む。図示できるような遺物は出土していない。SK42 は SD66 のすぐ際で検出した土坑である。平面形状は不整形で、長辺約 1.0 m、短辺約 0.65 m、深さ約 0.2 mを測る。埋土は暗褐色シルト質土で、少量の炭を含む。内部は南側が階段状になっている。図示できるような遺物は出土していない。SK43 は卵形の平面形状をした土坑で、東西方向に主軸を持つ。長辺約 1.15 m、短辺約 0.9 m、深さ約 0.3 mを測る。埋土は暗灰褐色シルト質土で、黒色土器椀の底部が出土した他は図示できるものはない。出土遺物から古代に属する可能性が高い。SK69 は東壁際で検出した土坑で、旧管理棟基礎の攪乱や調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。内部は西側に向かって階段状に低くなっており、西側壁際から完形の須恵器坏が出土したが、底面からは浮いた状態である。その他に図示できる遺物は出土していないが、古墳時代後期の遺構の可能性が高い。

SK43・SK69 出土遺物

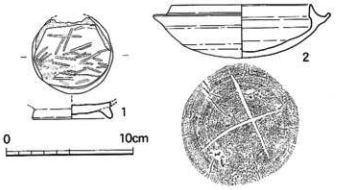
第 62 図 1 は SK43 から出土した、両黒の黒色土器 B 類椀の底部である。底面には高めの高台を貼り付け、見込みには暗文を施す。2 は SK69 から出土した須恵器の坏で、受け部から口縁部の立ち上がりは短く内傾する。底面には「×」状のヘラ記号を施す。TK209 型式に該当しよう。



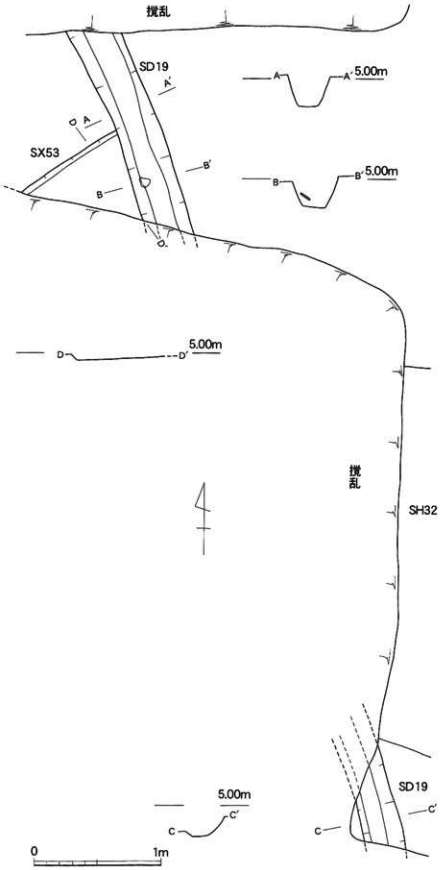
第 60 図　SD66 出土遺物実測図（3）



第 61 図　SK41・SK42・SK43・SK69 実測図



第 62 図　SK43・SK69 出土遺物実測図



第 63 図　SD19・SX53 実測図

SD19（第 63 図）

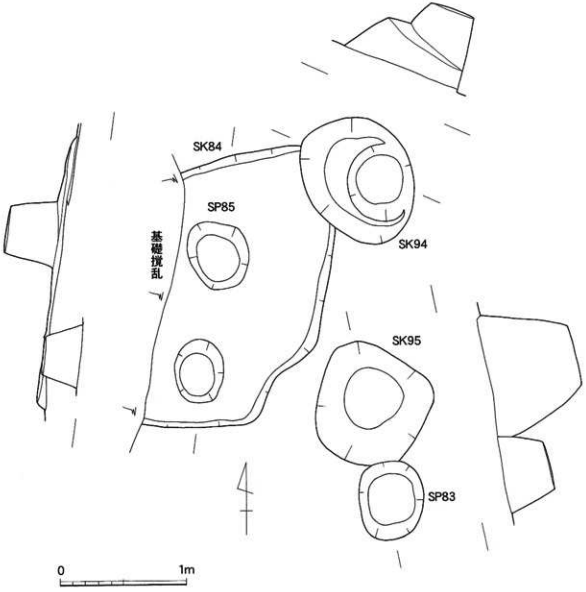
B2・B3 区で検出した溝である。中央の大部分を旧管理棟基礎の撹乱によって失うが、長さ 6.8 m以上、幅 0.3 ～ 0.35 mを測る。断面は逆台形状の掘り込みで、深さは 0.25 m前後である。位置関係から弥生時代後期の竪穴住居 SH32 と重複するはずだが、その前後関係は明らかにできない。また、溝の西側には SX53 とした浅い落ち込みが認められたが、溝との関係は不明である。出土遺物は少なく、遺構の時期を決定できるようなものは出土していない。

SK85・SK93・SK94（第 64 図）

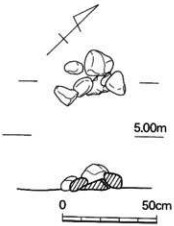
D3 区で検出した土坑群である。SK85 は西側を旧管理棟基礎の撹乱によって失うが、長辺約 2.2 mを測る。深さはごく浅く、1 箇所にピット状の掘り込みを伴う。また、その南にもう 1 基ピットがあるが、これは上位からの掘り込みである。SK94 はこの SK85 を切る楕円形の土坑で、長辺約 1.05 m、短辺約 0.9 mを測る。内部は東側がピット状に深く掘り込まれる。SK93 は SK94 の南で検出した土坑で、1 辺約 0.9 mの隅丸方形状を呈する。これらの遺構からは図示できるような遺物が出土していないため、遺構の時期は明らかにできない。

SX36（第 65 図）

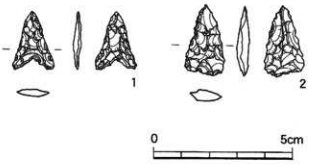
E3 区で検出した集石遺構である。7 点の礫が固まっており、その分布範囲は長辺約 0.4 m、短辺約 0.25 mを測る。周囲を精査したが、掘り込みは認められない。調査時に周囲から炭の微細片が確認されたが、集石を覆う第 3 層自体に



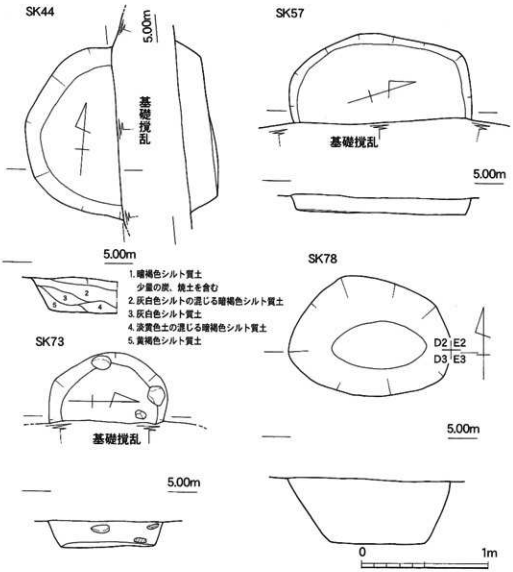
第 64 図　SK84・SK94・SK95 実測図



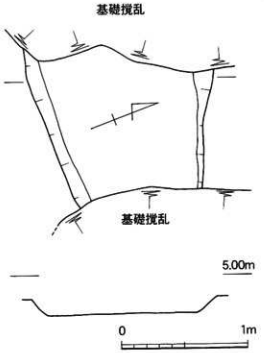
第 65 図　SX36 実測図



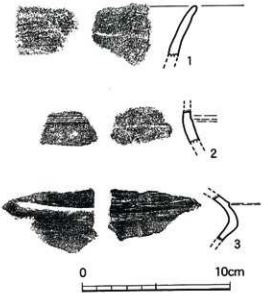
第 66 図　SX36 出土遺物実測図



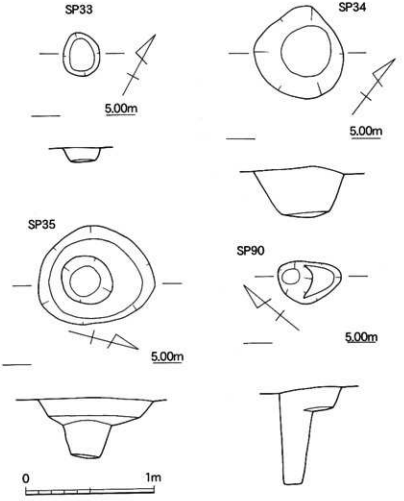
第 67 図　SK44・SK57・SK73・SK78 実測図



第 68 図　SK91 実測図



第 70 図　ピット出土遺物実測図



第 69 図　ピット実測図

炭を含むため、本遺構に伴うものかは明らかにできない。礫に被熱等の痕跡は確認できなかった。遺物は石鏃の他、縄文土器や黒曜石片が出土している。縄文時代の遺構の可能性も考えられるが、掘り込みを伴わないため時期は明確にできない。

SX36 出土遺物

第66図1は凹基無茎式の石鏃である。2は平基無茎式の石鏃で、側辺は連続的に剥離する。いずれも石材はガラス質安山岩である。

SK44（第67図）

C2区で検出した土坑で、東半部は旧管理棟基礎の撹乱を受けるものの平面円形を呈すると考えられる。規模は南北約1.35 m、深さは約0.3 mを測る。埋土は5層に細分され、最上層には少量ながら焼土や炭を含む図示できるような遺物は出土していない。

SK57（第67図）

SK57はC1区で検出した土坑で、東半部を旧管理棟基礎の撹乱によって失うものの平面隅丸方形状を呈すると考えられる。規模は東西0.7 m以上、南北約0.95 m、深さ約0.1 mを測り、埋土は暗褐色のシルト質土である。図示できるような遺物は出土していない。

SK73（第67図）

SK73はE2区で検出した土坑で、東半部を旧管理棟基礎の撹乱で失うものの平面円形を呈すると考えられる。直径は約0.95 m、深さ約0.2 mを測る。埋土は暗褐色のシルト質土で、内部には3点の礫が認められたが、規則的な配置等はなく人為的なものではないと判断される。図示できるような遺物は出土していない。

SK78(第67図)

SK78はD2・D3グリッドで検出した楕円形の土坑である。規模は長辺約1.3 m、短辺約0.95 m、深さ約0.5 mを測る。埋土は暗褐色のシルト質土で、少量の炭が認められた。図示できるような遺物は出土していない。

SK91（第68図）

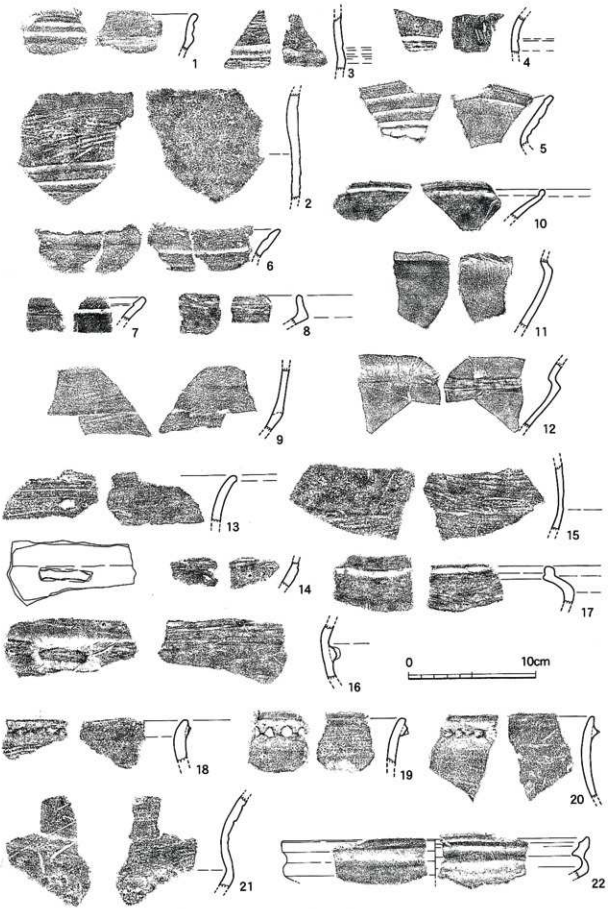
C2・C3区で検出した遺構で、西端を旧管理棟基礎、東端をSD23の撹乱で欠くため詳細は不明だが土坑と判断した。遺構の規模は東西1.2 m以上、南北約1.3 m、深さ約0.1 mを測る。埋土は淡褐色シルト質土と暗褐色シルト質土が混合した土である。図示できるような遺物は出土していない。

ピット（第69図）

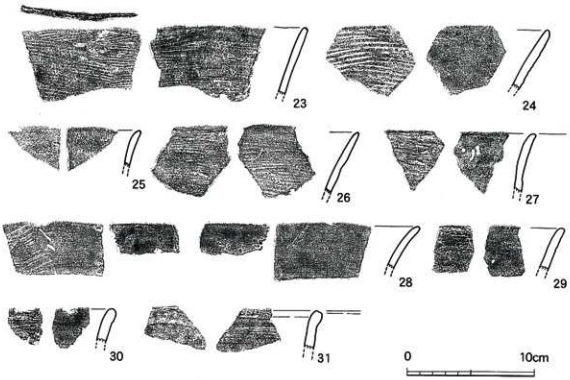
ここでは主に図示できる遺物が出土したものを取り上げる。SP33はE3区で検出したピットで、直径30～35cm前後の楕円形状を呈する。遺物は縄文土器が出土している。SP34はE3区で検出したもので、直径約0.7 mの不整円形を呈する。遺物は縄文土器や姫島産の黒曜石が出土している。SP35はE3区で検出したピットで、長辺約0.95 m、短辺約0.8 mの楕円形状を呈する。内部の中央には円形の掘り込みがあり、柱穴としての性格が想定できる。図示できるような遺物は出土していないが、姫島産黒曜石が2点出土している。SP90はD3区で検出したピットで、平面は卵形を呈し、長辺約0.5 m、短辺約0.35 mを測る。北半部は円形に深く掘り込まれ、もう半分はテラス状に段が付く。遺物は縄文土器等が出土している。

ピット出土遺物

第70図1～3はいずれも縄文土器である。1は外に開く口縁部で、端部は丸い。外面は条痕を施し、内面はナデ調整の深鉢である。後期末～晩期のものであろう。2は内傾する破片で、上端に浅い凹線を施す。凹線内には施文工具の筋が残る。後期末～晩期初頭に位置づけられようか。3は大きく内湾する黒色磨研の浅鉢で、外面の肩部に段を持つ。晩期のものである。以上の遺物について、1はSP33、2はSP34、3はSP90から出土した。



第 71 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（1）



第 72 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（2）

(5) 包含層出土遺物

包含層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の他、石器や土製品、鉄製品、石製品等が出土している。そのほとんどは第 3 層からの出土である。以下、各時期ごとに大別して報告する。

1．縄文時代の遺物

縄文時代の遺物として土器と石器がある。縄文土器は後期末から晩期末にかけてのものであり、以下のように大別する。

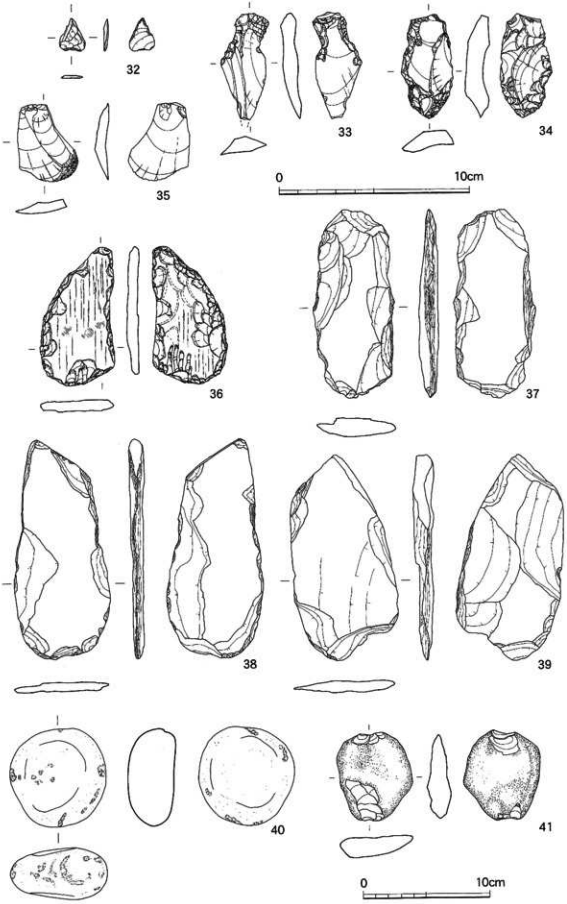
Ⅰ群　後期末から晩期初頭の土器
Ⅱ群　晩期前半の土器
Ⅲ群　晩期中葉の土器
Ⅳ群　晩期後半の凸帯文土器
Ⅴ群　後期～晩期の無文土器

第 71 図 1 ～ 5 は後期末の第Ⅰ群土器である。1 は屈曲する口縁部で、外面に沈線を施す。2･3 は胴部文様帯の破片で、段によって沈線状の文様を作り出す。5 は波状口縁の浅鉢で、内面口縁下に段を持つ。

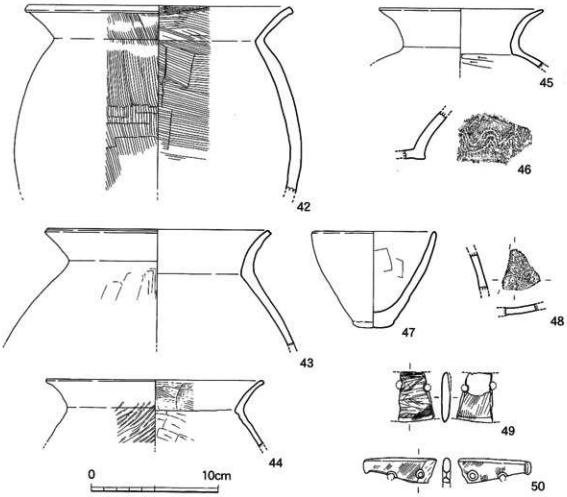
6 ～ 12 は晩期初頭～前葉の第Ⅱ群土器である。6・7 は口縁部を若干肥厚させ、内面には段を持つ。8 は口縁部が内側に強く屈曲する器形で、深鉢であろう。9 は深鉢の胴部で、胴部が屈曲する。10 ～ 12 は浅鉢である。10 は黒色磨研土器で、内外面の口縁下に沈線状の段を持つ。11・12 は胴部で強く屈曲する。

13 ～ 17 は第Ⅲ群とした、晩期中葉に位置づけられる一群である。13・14 は深鉢で、外面に多条の細沈線を施す。15 は滋賀里Ⅲａ式併行の深鉢胴部で、下部は条痕を施し、上部はナデ調整で、調整が異なる。16 は突起の付く深鉢胴部で、黒川式併行にあたる。17 は浅鉢で、口縁は大きく内湾し、端部は短く上方に延びる。

18 ～ 22 は晩期後半の第Ⅳ群上器である。18 ～ 20 は凸帯文土器で、口縁端部のやや下方に 1 条の刻み目凸帯を施す。口縁端部は丸くおさめ、刻みは見られない。21 は胴部に斜位のヘラ描き細沈線を施すもので、瀬戸内系の深鉢である。22 は浅鉢で、口縁部を外上方に拡張する。



第 73 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（3）



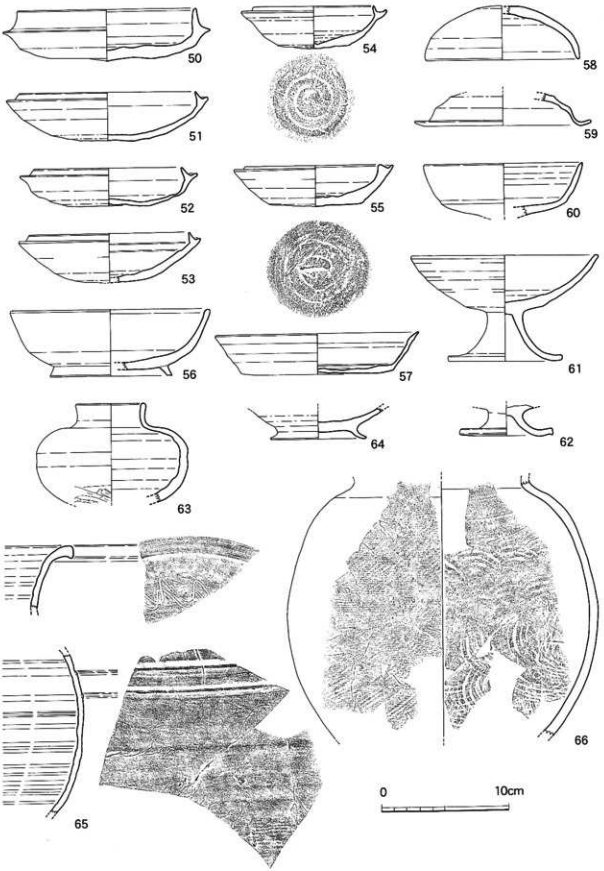
第 74 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（4）

第 72 図 23 ～ 31 は第Ⅴ群の無文土器で、いずれも深鉢である。23・24 は外に直線的に開く器形で、23 は口縁端部に刻みを施す。25 ～ 29 は口縁部が外反する器形で、いずれも端部は丸くおさめる。30・31 も口縁が外反するもので、25 ～ 29 に比べやや厚手である。端部は 30 は丸く、31 は面を持つ。

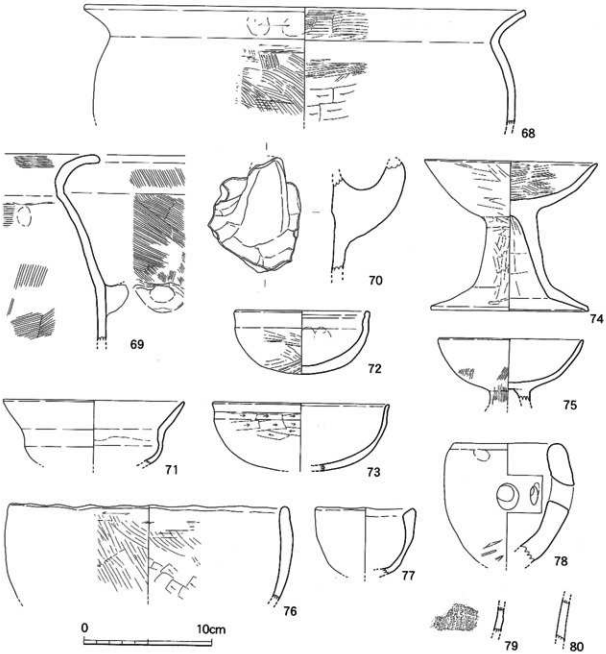
石器は石鏃等の剥片石器、扁平打製石斧や叩石、石錘といった礫石器が認められる他、石核や多量の剥片も出土している。剥片では姫島産黒曜石が圧倒的多数を占めるが、少量ながら腰岳産黒曜石と思われる黒色系の黒曜石も認められる。包含層から出土した剥片・石核類の合計は 51 点 235.5 g で、石材別重量は姫島産黒曜石が 47 点 227.4 g、腰岳産黒曜石が 4 点 8.1 g である[註6)]。

第 73 図 32 ～ 35 は剥片石器である。32 は石鏃の未製品で、石材は姫島産黒曜石である。33 は摘みを持つ剥片で、連続的に加撃して摘み部を作出する。34 は石核、35 は剥片で、素材はいずれも姫島産黒曜石である。36 ～ 41 は礫石器である。36 ～ 39 は扁平打製石斧で、石材はいずれも結晶片岩である。40 は円礫を利用した叩石で、上面と周縁に敲打痕が残る。41 は河原石製の石錘で、上下両端を打ち欠いて縄掛け部を作り出す。重量は 74.0 g である。

註 6）石器石材の識別は肉眼観察による。



第 75 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（5）



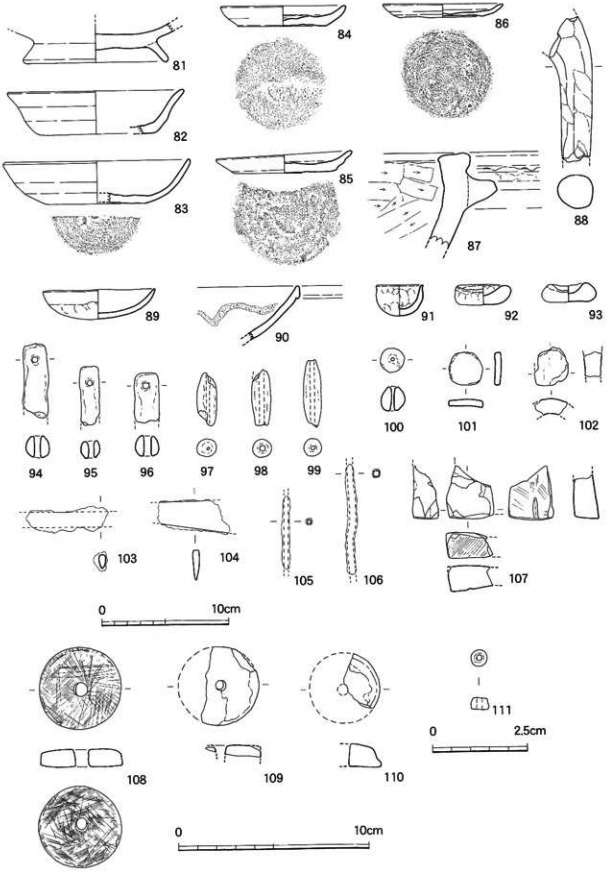
第 76 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図 (6)

2．弥生時代から古墳時代初頭の遺物

第 74 図 42・43 は弥生土器の甕で、42 は内外面ともハケ調整を密に施す。44 は外面タタキ調整の土師器甕で、内面はケズリ調整を施す。古墳時代初頭に位置づけられよう。45 は土師器で、胴部が広がる器形から壺と判断する。内面はケズリ調整を施す。46 は複合口縁の壺で、外反の度合いが通常のものよりも強い。外面には波状文を施す。47 は底部が平底になる弥生土器の小型鉢である。48 は外面に斜格子状のヘラ描文を施す破片で、横断面の一端が肥厚気味になる点から手焙形土器の蔵部の立ち上がり部分の破片と思われる。49 は石庖丁で、2 箇所に穿孔がある。50 も 2 箇所に穿孔があり、石庖丁か。いずれも内外面とも擦痕が顕著である。

3．古墳時代～中世の遺物

第 75 図は須恵器である。51 ～ 58 は坏である。50 は受け部から口縁が上方に延び、端部は丸い。51 ～ 53 は受け部



第 77 図　高畑遺跡包含層出土遺物実測図（7）

から口縁の立ち上がりが短く内傾する。器形から 51 は TK10 型式、51 は TK43 ～ TK209 型式、52・53 は TK209 型式に該当する。55・56 は受部から口縁部の立ち上がりがごく短く、胴部が深い。底面にはヘラ切り痕が認められる。いずれも 7 世紀前半代に位置づけられよう。57 は高台付きの坏で、8 世紀に比定できる。58 は薄手の坏で、8 世紀後半頃か。59 は坏蓋で、天井部が高く、口縁端部の沈線が消失している点から TK10 ～ TK43 型式併行であろう。60 は口縁端部が反り返る器形で、天井部はヘラケズリを施す。短頸壺の蓋とされるもので、福岡県大野城市の牛頸窯跡群小田浦地区 38- Ⅰ号窯跡灰原に出土例がある[註7)]。61 ～ 63 は高坏である。61 は坏部が屈曲する器形で、6 世紀代に比定できる。62 は 7 世紀代の高坏で、坏部・脚部とも丸く曲線的である。63 は低脚の高坏で、やはり 7 世紀代に位置づけられる。64・65 は壺である。64 は短頸壺で、底面にヘラケズリを施す。概ね 6 世紀代に該当しよう。65 は高台の付く底部破片で、8 世紀代に位置づけられよう。66 は甕で、外面口縁下に波状文を施し、胴部には 2 条の凸帯を持つ。67 も甕で、外面はタタキの後カキ目を施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。

第 76 図は土師器である。68 は口径 35cm 以上を測る大型の甕である。69・70 は把手付きの甕で、69 は把手の下端が剥離している。71 は小型丸底壺である。72・73 は丸底の鉢で、72 は内面口縁下に沈線を施す。74・75 は高坏である。74 は裾から脚部への立ち上がり部で屈曲し、坏部は丸い。脚部・坏部ともにミガキを密に施す。75 は坏部が丸みを持ち、外面にハケ目調整を施す。76 は口縁部が波状にうねるもので、大型の鉢か。77・78 は蓋壺で、78 には穿孔がある。79・80 は製塩土器で、79 は内面に布目痕が残る。

第 77 図は古代以降の土器類及び土製品、鉄製品、石製品である。

81 ～ 83 は土師器坏で、81 は高台が付く 8 世紀代のものである。83 は底面にヘラ切り痕が残る。84 ～ 86 は小皿で、84・85 は底面にヘラ切り痕、86 は回転糸切り痕が残る。10 世紀～ 11 世紀頃の所産であろう。87 は外面に凸帯を持つもので、鍋であろう。器厚は 1.5cm 前後と厚手である。88 は古代の脚付鍋の脚部である。89 は手捏ね整形の土師器皿で、中世に属する。90 は白磁の玉縁碗で、2 層からの出土である。

91 ～ 111 は土製品、鉄製品、石製品である。91 は土師質焼成のミニチュア土器である。内外面ともに指頭圧痕が顕著に残る。92・93 は円形の粘土塊の中央を指頭で凹ませたものである。94 ～ 99 はは土錘で、94 ～ 96 は両端に穿孔する棒状土錘、95 ～ 99 は管状土錘である。100 は土玉、101 は土製円盤、102 は鞴羽口である。103 ～ 106 は鉄製品で、103・104 は刃物、105・106 は釘である。107 は砥石で、使用面には顕著な擦痕が残る。108 ～ 110 は紡錘車である。石材は 109 が結晶片岩の他は滑石である。111 は小玉で、側面をカットして成形している。石材は滑石であろうか。

註 7) 舟山良一編　1993『牛頸小田浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 40 集　大野城市教育委員会

第4章　総　括

1．縄文時代について

高畑遺跡については昭和24年に2体の土偶が出土したことで知られていたことから、今回の発掘調査でも縄文時代の遺構・遺物の出土が予想されたところである。ところが、実際に発掘したところ縄文時代の遺物は一定量出土したものの、明確な遺構を確認することはできなかった。ただし、一部の遺構からは縄文土器が出土しており、当該期の遺構が存在する可能性は否定できない。

しかし、遺物が一定量出土していること、また過去に土偶が出土したことを考慮すると、縄文時代の集落の存在を十分に考え得る遺跡であることは疑いがないだろう。以下、縄文時代遺物の出土傾向から当該期の遺跡が存在する範囲を検討する。

縄文時代の遺物としては土器と石器があることは本報告のとおりである。遺物整理の過程で縄文土器の抽出を行ったところ、その数は130点を数えた。出土地点別の数量を第1表に示す。これを見ると、土器が出土する地点には偏りがあることが分かる。土器が出土するのはD2・D3・E2・E3・F2・F3の各グリッドで、その他からは全く出土していない。

次に石器の出土傾向を検討する。土器と同様に石器は89点を抽出した。グリッドごとの出土点数を第2表に示す。これを見ると、土器とほぼ同様の傾向を指摘することができよう。遺構や攪乱、3層一括のグリッドを特定できないものを除いた50点中、実に46点がD～F区からの出土である。

第78図は第1・2表を基に各グリッドの出土傾向を示したものである。これを見ると縄文土器が出土するのはもっぱら東側にあるグリッドで、西側のグリッドからはほとんど出土していないことは一目瞭然である。次に土器の約54%、石器の約42%を占める遺構出土分を検討すると、やはり遺物が出土している遺構の多くはD～Fグリッドにあることが分かる。したがって、このD～F区以東に縄文時代の遺構が存在する可能性が高い。また、南側のグリッドで石器の重量が比較的大きい点は、D～F区から南東側に遺跡が広がっている可能性を示していよう。

これらの遺物は包含層からの出土であり、本来の位置を保つものではないが、このように出土地点が限定される状況を考慮すると、上記の蓋然性は高いと考えられる。

2．弥生時代について

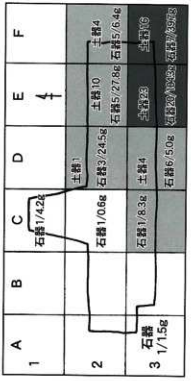
弥生時代の遺構としては竪穴住居SH32とそれに関係する土器集中部SX16・17がある。これらの遺構からは多量の弥生後期土器が出土しており、かつその残りがよい個体が多い。これらの遺物のほとんどがSH32の検出面から上で出土していることから、SH32廃絶後に形成されたものとしてよい。出土した土器の中でも高坏の比率が高く、住居廃絶時の祭祀行為に用いられたことを想定させる。

3．古墳時代～古代について

古墳時代の遺構は竪穴住居2棟、総柱の掘立柱建物1棟の他、多数の土坑がある。また、SH32の近くで検出したSX15は古墳時代初頭と考えられ、弥生時代後期から継続的に集落が営まれていた可能性を示唆する。古代の遺構は竪穴遺構SK80や土坑SK18、溝SD66が挙げられる。5世紀～10世紀にかけて継続的に集落が営まれたことを示している。遺物としては瓦や緑釉陶器が出土しているが、その数は少なく、ごく一般的な集落であったと考えられる。土錘や蛸壺等の漁撈に関係する遺物も一定量出土しており、海岸に近い集落の特徴を示しているといえよう。

第１表　グリッド別縄文土器出土点数と遺構内訳

グリッド	掲載土器	未掲載土器	小計	遺構名	総数	掲載土器	未掲載土器	帰属グリッド
A2	0	0	0	SD3	3	4	7	D～F
A3	0	0	0	SK6	1	0	1	D3
B2	0	0	0	SD9	0	1	1	F2
B3	0	0	0	SK20	1	0	1	C2
C1	0	0	0	SP33	1	0	1	E3
C2	0	0	0	SP34	1	0	1	E3
C3	0	0	0	SX36	0	1	1	E3
D2	0	1	1	SK42	0	2	2	F3
D3	3	1	4	SD66	10	13	23	F2･F3
E2	5	5	10	SK69	0	8	8	F3
E3	13	10	23	SH70	1	7	8	E2
F2	4	0	4	SK77	1	1	2	E2･F2
F3	5	11	16	SK79	2	2	4	D3
遺構出土	23	47	70	SK80	0	2	2	D3･E3
基礎撹乱	1	1	2	SK81	0	1	1	D3
総計	54	76	130	SK82	0	3	3	D2･D3
				SK88	0	1	1	E2
				SK89	1	1	2	E2
				SP90	1	0	1	D3



第 78 図　グリッド別 縄文土器・石器出土傾向

第２表　グリッド別石器出土点数・重量と遺構内訳

グリッド	掲載石器	未掲載石器	小計	姫島産		腰岳産		ガラス質安山岩		不明	
				点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
A2	0	0	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
A3	0	1	1	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
B2	0	0	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
B3	0	0	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
C1	0	1	1	1	4.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
C2	1	0	1	1	0.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0
C3	0	1	1	1	8.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
D2	0	3	3	3	24.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
D3	0	6	6	4	5.0	2	2.8	0	0.0	0	0.0
E2	0	5	5	5	27.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0
E3	2	18	20	19	104.3	1	0.7	0	0.0	0	0.0
F2	0	4	5	4	6.4	1	4.6	0	0.0	0	0.0
F3	1	7	7	7	39.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3 層一括	0	1	1	1	5.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
遺構出土	6	31	37	30	123.5	1	2.5	5	83.7	1	4.7
基礎撹乱	0	1	1	1	2.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
総計	10	79	89	78	353.4	5	10.6	5	83.7	1	4.7

遺構出土石器内訳

SD3	0	2	0	2	5.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SD10	0	2	0	2	3.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SK20	0	1	0	1	2.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SD23	0	1	0	0	4.7	0	0.0	0	0.0	1	4.7
SP34	0	2	0	2	20.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SP35	0	2	0	2	1.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SX36	2	1	0	1	4.5	0	0.0	2	1.7	0	0.0
SD66	3	5	8	5	31.6	0	0.0	3	82.0	0	0.0
SH70	0	4	0	4	13.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SK73	0	1	0	0		1	2.5	0	0.0	0	0.0
SK79	0	2	0	2	15.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SK80	1	7	0	8	25.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0
SK88	0	1	0	1	0.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0

土器・陶磁器観察表

挿図番号		器種		出土地点	法量(cm)			胎土調整		色調		備考
					口径・底径等	器高		外面	内面			
第7図	1	縄文土器	深鉢	SD3		—	—	条痕		ナデ	茶褐色	
	2	縄文土器	深鉢	SD3		—	—	ナデ	条痕	条痕	茶褐色	
	3	縄文土器	深鉢	SD3		—	—	条痕	条痕	条痕	茶褐色	
	4	焼締陶器	盤	SD3	口径	(24.2)	(3.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	暗紫灰色	
	5	土師質土器	擂鉢	SD3		—	—	ケズリ	ミガキ	橙色	黒灰色	高村焼
第9図	1	土師質土器	不明	SD9	底径	4.8	7.3	ナデ	ナデ	にぶい橙色		
第11図	1	土師質土器	甕	SK1	底径	18.7	—	ナデ、指オサエ	ハケ目	褐色、にぶい橙色		
第12図	1	土師質土器	鉢	SK2	口径	35.4	25.7	ハケ目	ハケ目	淡橙色		底部穿孔
第14図	1	須恵器	高坏	SK5	口径	(10.3)	6.35	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色		
	2	土師器	小皿	SK6	口径	(5.1)	1.1	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色		底面回転糸切り痕
	3	土師器	皿	SK6	口径	(8.6)	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ	黄橙色		底面回転糸切り痕
	4	縄文土器	浅鉢	SK6		—	—	ナデ	ナデ	茶褐色		口縁部に突起
第16図	1	縄文土器	浅鉢	SK20		—	—	ナデ	ミガキ	茶褐色		
	2	土師質土器	焜炉	SK20	底径	18.8	—	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色		
	3	土師質土器	焜炉	SK20	底径	19.4	—	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色		
	4	土師質土器	焜炉	SK20	口径	(22.0)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄橙色		突起あり
	5	瓦	軒平瓦	SK20	瓦当幅	3.2	—	ナデ	ナデ	赤褐色		唐草文
	9	ガラス瓶	ワインボトル	SK20	底径	7.2	(13.65)			濃緑色		気泡含む
第20図	1	須恵器	甕	SD23		—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色		波状文原体刺突
	2	瓦	軒丸瓦	SD23	長さ	(8.2)	—	ナデ	ナデ	黄灰色		連珠文と左巻巴文
第23図	1	施釉陶器	徳利	SK29	底径	8.2	(23.9)			黒褐色		底面回転糸切り痕
	2	施釉陶器	徳利	SK29	底径	9.6	(23.4)			褐色		底面回転糸切り痕
第25図	1	磁器	皿	SK30	口径	9.4	2.0			明黄色、灰白色		鉄釉を半分掛け分け
	2	磁器	小坏	SK30	口径	5.2	3.3			乳白色		植物文
第29図	1	弥生土器	壺	SX15	口径	(21.4)	—	ハケ目	ケズリ	橙色		翼部にヘラ描き線
	2	弥生土器	壺	SX15	口径	(15.8)	—	ナデ	ハケ目、ケズリ	黄褐色		
	3	土師器	壺	SX15	口径	(14.8)	16.9	ハケ目	ケズリ	橙色		
第31図	1	弥生土器	壺	SX16	口径	21.4	35.1	ケズリ→ナデ	ナデ	赤褐色、暗褐色		SX17、SH32と接合
	2	弥生土器	壺	SX16	底径	4.1	—	工具ナデ	ナデ、指オサエ	にぶい黄橙色		
	3	弥生土器	壺	SX16	口径	(17.8)	—	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙色		
第32図	4	弥生土器	壺形土器	SX16	口径	13.4	11.4	ハケ目	ハケ目	黒灰褐色		
	5	弥生土器	高坏	SX16	口径	(32.8)	—	ミガキ	ミガキ	淡褐色、橙褐色		黒斑あり
第34図	1	弥生土器	壺	SX17	口径	(15.6)	—	ナデ	ナデ、指オサエ	黄橙色		
	2	弥生土器	壺	SX17		—	—	ハケ目	ハケ目	茶褐色		凸帯上ハケ原体刺突
	3	弥生土器	高坏	SX17		—	—	ミガキ	ナデ	淡黄橙色、明橙色		
	4	弥生土器	高坏	SX17	底径	(16.4)	—	ミガキ	ハケ目	明黄橙色		
第36図	1	弥生土器	壺	SH32	口径	(17.4)	—	ハケ目	ハケ目、指オサエ	橙褐色		
	2	弥生土器	壺	SH32	口径	19.2	—	タタキ→ナデ	ハケ目→ナデ	橙色		
	3	弥生土器	壺	SH32	底径	5.6	—	ハケ目	ハケ目	灰黄橙色		
	4	弥生土器	壺	SH32	底径	4.5	—	ハケ目	不明	明橙色		内面付着物
	5	弥生土器	壺形土器	SH32	口径	(14.1)	16.2	ミガキ	ナデ、指オサエ	黄橙褐色		
	6	弥生土器	壺形土器	SH32	口径	(11.8)	16.8	ケズリ→ミガキ	ケズリ	橙褐色		
	7	弥生土器	壺	SH32	口径	(13.3)	—	ナデ、ミガキ	ナデ、指オサエ	黄橙色		
	8	弥生土器	複合口縁壺	SH32	口径	(15.6)	—	ハケ目	ハケ目	橙褐色		SX17と接合
第37図	9	弥生土器	高坏	SH32	口径	18.8	—	ハケ目→ミガキ	ハケ目	淡黄灰色、橙色		豊田系
	10	弥生土器	高坏	SH32	口径	32.2	—	ハケ目→ミガキ	ミガキ	黄橙褐色		
	11	弥生土器	高坏	SH32	口径	32.5	—	ミガキ	ミガキ	橙褐色		
	12	弥生土器	高坏	SH32	底径	17.6		ミガキ	ハケ目	橙色		
第39図	1	須恵器	坏蓋	SH70		—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色		
	2	須恵器	蓋?	SH70	口径	(13.2)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色		
	3	土師器	甕	SH70	口径	(15.4)	—	ナデ	ケズリ、指オサエ	浅黄橙色		
	4	土師器	甕	SH70		—	—	ハケ目	ナデ、ハケ目	明褐色、黄灰色		底部穿孔
	9	縄文土器	深鉢	SH70		—	—	ナデ	条痕	黒色		刻目凸帯文
第41図	1	須恵器	坏	SH64	口径	13.2	3.1	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	黒灰色		
	2	土師器	甕	SH64	口径	(17.0)	—	ハケ目	ハケ目	にぶい橙色		
	3	土師器	鉢	SH64	口径	(16.0)	4.3	ハケ目	ハケ目	淡黄橙色		SK87と接合
	4	土師器	小型丸底壺	SH64	口径	(10.5)	—	ミガキ、ハケ目	ミガキ	橙色		
	5	土師器	鍋蓋	SH64	口径	(7.0)	—	ナデ	ナデ	浅黄橙色		
第43図	1	須恵器	坏	SB1	口径	(12.8)	3.0	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	青灰色		SP56
	2	土師器	小型壺	SB1	底径	(5.0)	(6.0)	ナデ	ナデ	淡橙褐色		SP56
第45図	1	須恵器	坏蓋	SX31	口径	(12.1)	4.0	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	灰色		
	2	弥生土器	壺	SX31	口径	(16.2)	—	ナデ	ナデ	灰黄橙色、灰橙色		
	3	弥生土器	甕	SX31		—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色		
	4	土師器	鉢	SX31	口径	(9.7)	7.0	ナデ	ナデ	明橙色		底径5cm
第47図	1	土師器	甕	SK77	口径	(17.8)	—	ナデ	ケズリ	橙色		内面煤付着
	2	土師器	鉢	SK77	口径	(10.8)	(4.3)	ミガキ→ナデ	ミガキ→ナデ	暗茶褐色		内面付着物
	3	縄文土器	深鉢	SK77		—	—	ナデ、条痕	ナデ	茶褐色		
	4	縄文土器	深鉢	SK89		—	—	ナデ	ナデ	茶褐色		
第49図	1	須恵器	高坏?	SK82	口径	(12.0)	—	カキ目	ヨコナデ	灰色		
	2	土師器	壺	SK82		—	—	ナデ	ハケ目	浅黄色		凸帯状斜格子刻み
	3	土師器	甕	SK82	口径	(14.2)	—	ハケ目	ハケ目、ケズリ	にぶい橙色		

挿図番号		器種		出土地点	法量(cm) 口径・底径等	器高	器面調整 外面	内面	色調	備考
第50図	1	縄文土器	浅鉢	SK79	—	—	ナデ	ミガキ	茶褐色	
	2	縄文土器	深鉢	SK79	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	
第52図	1	須恵器	坏蓋	SK80	口径 (13.8)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	
	2	土師器	甕	SK80	口径 (18.0)	—	ナデ	ハケ目	暗褐色	
	3	製塩土器		SK80	—	—	ナデ	布目痕	浅黄色	
	4	製塩土器		SK80	—	—	ナデ	布目痕	浅黄色	
	5	製塩土器		SK80	—	—	ナデ	布目痕	浅黄色	
	6	製塩土器		SK80	—	—	ナデ、指オサエ	布目痕	灰褐色	
第54図	1	須恵器	坏蓋	SK18	口径 (15.8)	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	
	2	須恵器	坏	SK18	底径 5.6	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	
	3	土師器	甕	SK18	口径 (15.8)	3.2	ナデ	ナデ	灰色	宝珠つまみ
第56図	1	須恵器	坏	SD22	口径 (11.0)	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	
	2	須恵器	壺	SD22	底径 8.6	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	
	3	土師器	鉢	SD22	口径 (13.2)	(5.3)	ハケ目	ナデ	橙褐色	
第58図	1	須恵器	坏蓋	SD66	摘み径 2.8	—	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	灰色	宝珠つまみ
	2	土師器	坏	SD66	口径 15.2	1.4	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色	底面ヘラ切り
	3	土師器	小皿	SD66	口径 9.4	2.2	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	底面ヘラ切り
	4	土師器	小皿	SD66	口径 9.0	1.2	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	底面ヘラ切り
	5	土師器	小皿	SD66	口径 9.8	1.05	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	底面ヘラ切り
	6	土師器	小皿	SD66	口径 9.2	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	底面ヘラ切り
	7	土師器	小皿	SD66	口径 10.3	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色	底面ヘラ切り
	8	土師器	坏	SD66	口径 (16.7)	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	底面ヘラ切り
	9	土師器	坏	SD66	口径 13.6	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色	底面ヘラ切り
	10	土師器	坏	SD66	口径 15.5	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色、灰白色	底面ヘラ切り
	11	土師器	坏	SD66	口径 (16.2)	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	白黄色	底面ヘラ切り後板状圧痕
	12	土師器	坏	SD66	口径 12.8	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	底面ヘラ切り
	13	土師器	坏	SD66	口径 (14.8)	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	底面糸切り後板状圧痕
	14	土師器	坏	SD66	口径 (14.0)	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	底面ヘラ切り
	15	土師器	小皿	SD66	口径 9.2	1.4	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	底面回転糸切り痕
	16	土師器	坏	SD66	口径 13.2	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	底面糸切り後板状圧痕
	17	土師器	坏	SD66	口径 (15.4)	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	底面糸切り後板状圧痕
	18	土師器	坏	SD66	口径 15.2	3.85	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄橙色	底面回転糸切り痕
第59図	19	黒色土器	椀	SD66	口径 (15.0)	—	ナデ	ミガキ	灰白色	A類内黒椀
	20	黒色土器	椀	SD66	底径 7.1	—	ナデ	ミガキ	褐灰色、にぶい黄橙色	A類内黒椀
	21	緑釉陶器	椀	SD66	底径 (7.0)	—			薄緑色	底面も施釉
	22	白磁	皿	SD66	口径 (13.2)	3.5			灰白色	高台露胎
	23	土師器	鍋把手	SD66	直径 4.0	—	ナデ	ナデ	灰白色	煤付着
	25	瓦	平瓦	SD66	幅 (13.4)	厚2.4	縄密タタキ	布目痕	明褐灰色	古代瓦
第60図	26	縄文土器	深鉢	SD66	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	
	27	縄文土器	深鉢	SD66	—	—	ナデ	ナデ	黄褐色	
	28	縄文土器	深鉢	SD66	—	—	ナデ	ミガキ	淡黄色	
	29	縄文土器	深鉢	SD66	—	—	ナデ、ミガキ	条痕	茶褐色	
	30	縄文土器	深鉢	SD66	—	—	ナデ	条痕ナデ消し	淡黄色	腹口縁
	31	縄文土器	深鉢	SD66	—	—	ナデ	ナデ	黒色	
	32	縄文土器	浅鉢	SD66	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	
	33	縄文土器	浅鉢	SD66	—	—	ナデ	ナデ	淡黄色	
	34	縄文土器	浅鉢	SD66	—	—	ナデ	ナデ	灰色	
	35	縄文土器	深鉢	SD66	底径 5.5	—	ナデ	ナデ	淡褐色	
第62図	1	黒色土器	椀	SK43	底径 6.3	—	ナデ	ミガキ	黒色	B類椀
	2	須恵器	坏	SK69	口径 11.1	4.25	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	黄灰色	底面「×」のヘラ記号
第70図		縄文土器	深鉢	SP33	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	
		縄文土器	深鉢	SP34	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	
		縄文土器	浅鉢	SP90	—	—	ナデ	ナデ	黒色	
第71図	1	縄文土器	深鉢	F2K3層	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐色	凹線文
	2	縄文土器	深鉢	F2E3層	—	—	条痕	ナデ	灰褐色	凹線文
	3	縄文土器	深鉢	E3E3層	—	—	条痕	ナデ	淡黄色	凹線文
	4	縄文土器	深鉢	E3K3層	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	凹線文
	5	縄文土器	浅鉢	F3K3層	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐色	凹線文、波状口縁
	6	縄文土器	深鉢	F2E3層	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐色	
	7	縄文土器	深鉢	E3E3層	—	—	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	暗褐色	
	8	縄文土器	深鉢	E2K3層	—	—	ナデ	ナデ	淡黄色	
	9	縄文土器	深鉢	F3K3層	—	—	ナデ、条痕	ナデ	橙褐色、褐灰色	
	10	縄文土器	浅鉢	E3E3層	—	—	ミガキ	ナデ	黒色	
	11	縄文土器	浅鉢	F3E3層	—	—	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	
	12	縄文土器	浅鉢	F3K3層	—	—	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	
	13	縄文土器	深鉢	E2K3層	—	—	ナデ	ナデ	灰色、黒色	多条細沈線
	14	縄文土器	深鉢	E2E3層	—	—	ナデ	ナデ	淡黄色、黒色	
	15	縄文土器	深鉢	E2E3層	—	—	ナデ、条痕	条痕	黒褐色	
	16	縄文土器	深鉢	D3K3層	—	—	ナデ、条痕	ナデ、条痕	茶褐色	胴部に突起
	17	縄文土器	浅鉢	E2E3層	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	
	18	縄文土器	深鉢	D3E3層	—	—	条痕	ナデ	茶褐色	刻目凸帯文
	19	縄文土器	深鉢	F3K3層	—	—	ナデ	条痕	褐灰色	刻目凸帯文
	20	縄文土器	深鉢	基礎掘乱	—	—	ナデ	ナデ	淡黄橙色	刻目凸帯文

挿図番号		器種		出土地点	法量(cm)			器面調整			色調	備考
					口径・底径等	器高		外面		内面		
第71図	21	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	ナデ		ナデ	黒褐色	斜位刻線、瀬戸内系
	22	縄文土器	浅鉢	E3区3層		—	—	ナデ		ナデ	黒色、茶褐色	
第72図	23	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	条痕		条痕	黒灰褐色	口縁端部に刻み
	24	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	条痕		ナデ	黒褐色、茶褐色	
	25	縄文土器	深鉢	F2区3層		—	—	ナデ		ナデ	黒褐色	
	26	縄文土器	深鉢	F3区3層		—	—	条痕		条痕	黄褐色	
	27	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	条痕		ナデ	黒色	
	28	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	ナデ		ミガキ	黒褐色、茶褐色	
	29	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	ナデ		ナデ	黒褐色	
	30	縄文土器	深鉢	E3区3層		—	—	条痕		ミガキ	暗褐色	
	31	縄文土器	深鉢	D3区3層		—	—	ナデ		条痕	淡黄色	
第74図	42	弥生土器	壺	D2区3層	口径	(20.8)	—	ハケ目		ハケ目	淡褐色、橙褐色	
	43	弥生土器	甕	E2区3層	口径	17.4	—	工具ナデ		ナデ	橙褐色	
	44	土師器	壺	3層	口径	(17.0)	—	タタキ		ハケ目、ケズリ	淡橙色	
	45	弥生土器	壺	B3区3層	口径	13.0	—	ナデ		ナデ、ケズリ	黄橙色	
	46	弥生土器	複合口縁壺	C3区3層		—	—	ナデ		ナデ	浅黄色	櫛描波状文
	47	弥生土器	鉢	B2区3層	口径	(9.8)	7.5	ナデ		工具ナデ	暗褐色	
	48	土師器	手焙形土器	3層		—	—	ナデ		ナデ	浅黄色	斜格子状の線刻
第75図	51	須恵器	坏	D2区3層	口径	(14.2)	4.1	回転ヘラケズリ		ヨコナデ	灰茶色	
	52	須恵器	坏	C3区3層	口径	(14.0)	3.8	回転ヘラケズリ		ヨコナデ	灰色	
	53	須恵器	坏	C3区3層	口径	(11.8)	3.0	回転ヘラケズリ		ヨコナデ	灰色	
	54	須恵器	坏	A3区3層	口径	(12.8)	3.9	回転ヘラケズリ		ヨコナデ	青灰色	
	55	須恵器	坏	D2区3層	口径	(9.5)	3.35	ヨコナデ		ヨコナデ	黄灰色	底面ヘラ切り
	56	須恵器	坏	D3区3層	口径	10.7	3.2	ヨコナデ		ヨコナデ	暗灰色	底面ヘラ切り
	57	須恵器	坏	B3区3層	口径	(15.8)	5.3	ヨコナデ		ヨコナデ	灰色	
	58	須恵器	坏	E3区3層	口径	(16.0)	4.3	ヨコナデ		ヨコナデ	淡灰色	底面ヘラ切り後ナデ
	59	須恵器	坏蓋	D3区3層	口径	(12.2)	(4.2)	回転ヘラケズリ		ヨコナデ	暗褐色、茶黒色	
	60	須恵器	蓋	B2区3層	口径	(12.2)	—	回転ヘラケズリ		ヨコナデ	灰色	短頸壺の蓋
	61	須恵器	高坏	3層	口径	(12.4)	—	ヨコナデ		ヨコナデ	暗青灰色、黄灰色	
	62	須恵器	高坏	C2区3層	口径	(14.6)	8.4	ヨコナデ		ヨコナデ	灰褐色	
	63	須恵器	高坏	D3区3層	底径	(7.4)	—	ヨコナデ		ヨコナデ	灰色	
	64	須恵器	短頸壺	C2区3層	口径	(5.6)	—	ナデ、底部ケズリ		ナデ	青灰色	
	65	須恵器	壺	E3区3層	底径	7.6	—	ヨコナデ		ヨコナデ	黒灰色	
	66	須恵器	甕	F3区3層		—	—	ヨコナデ		ヨコナデ	暗灰色	波状文
	67	須恵器	甕	F2区3層	頸部径	(13.4)	(20.3)	タタキ後カキ目		同心円当具痕	灰白色	
第76図	68	土師器	甕	C2区3層	口径	(35.0)	—	ハケ目		ハケ目、ケズリ	淡橙色、淡明灰色	
	69	土師器	把手付甕	3層		—	—	ハケ目		ハケ目	淡褐色	把手剥離
	70	土師器	把手付甕	D3区3層		—	—	ナデ		ナデ	淡褐色	
	71	土師器	小型丸底壺	C2区3層	口径	(14.0)	—	ナデ		ナデ	淡褐色、灰褐色	
	72	土師器	鉢	C2区3層	口径	(10.8)	5.0	ハケ目		ナデ	淡黄色	
	73	土師器	鉢	C1区3層	口径	(13.8)	(5.4)	ケズリ		ナデ	茶褐色、灰褐色	
	74	土師器	高坏	B2区3層	口径	13.4	11.9	ヘラミガキ		ミガキ、ナデ	橙色	
	75	土師器	高坏	C2区3層	口径	11.1	—	ハケ目		ナデ	淡橙褐色	
	76	土師器	鉢?	D2区3層	口径	(11.0)	—	ハケ目		ケズリ	淡黄色、淡橙色	口縁小波状
	77	土師器	蛸壺	E2区3層	口径	(7.6)	—	ナデ		ナデ	橙色	摩滅著しい
	78	土師器	蛸壺	C3区3層	口径	(8.4)	(9.5)	ナデ		ナデ	淡橙褐色	穿孔あり
	79	製塩土器		E3区3層		—	—	ナデ		布目痕	橙色	
	80	製塩土器		F3区3層		—	—	ナデ		布目痕	淡黄色	摩滅で布目不明瞭
第77図	81	土師器	高台付坏	B2区3層	底径	(11.4)	—	ナデ		ナデ	橙褐色	
	82	土師器	坏	D3区3層	口径	13.8	3.4	ナデ		ナデ	橙色	
	83	土師器	坏	E2区3層	口径	(14.6)	3.3	ナデ		ナデ	橙褐色	底面ヘラ切り
	84	土師器	皿	E3区3層	口径	9.8	1.6	ナデ		ナデ	淡褐色	底面ヘラ切り
	85	土師器	皿	E3区3層	口径	10.6	1.6	ナデ		ナデ	淡褐色	底面ヘラ切り
	86	土師器	皿	F3区3層	口径	9.4	1.1	ナデ		ナデ	淡橙褐色	底面回転糸切り痕
	87	土師器	鍋	E3区3層		—	—	ナデ		ケズリ	明淡橙褐色	凸帯
	88	土師器	鍋(脚部)	E3区3層		—	(11.5)	ナデ		—	淡灰褐色	
	89	土師器	皿	B3区3層	口径	8.9	2.3	ナデ、押圧痕有		ナデ	黄橙色	
	90	白磁	碗	2層		—	—				黄白色	玉縁碗

石器・石製品観察表

挿図番号		器種	石材	出土地点	法量(単位cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
第7図	7	紙石	?	SD3	(5.9)	1.9	1.1	19.2	
第14図	5	石庖丁	輝緑凝灰岩	SK5	(4.3)	(2.7)	0.5	7.0	
第16図	8	砥石	?	SK20	(7.5)	(5.1)	(0.9)	42.9	
第20図	3	硯	大草砂岩	SD23	(4.8)	(4.0)	1.8	52.4	
第41図	6	紡錘車	滑石	SH64	3.6	3.6	1.5	39.6	軸孔径5.5mm
第47図	4	磨製石斧?	結晶片岩	SK77	(10.1)	(6.0)	1.1	112.7	
第52図	7	打製石鏃	姫島産黒曜石	SK80	3.6	1.95	0.7	3.0	平基無茎式
第60図	36	敲石	河原石円礫	SD66	8.15	8.4	4.15	375.1	
	37	打製石鏃	ガラス質安山岩	SD66	(2.4)	1.9	0.5	2.5	平基無茎式
	38	打製石鏃	ガラス質安山岩	SD66	3.7	2.6	0.85	6.0	平基無茎式
	39	スクレイパー	ガラス質安山岩	SD66	6.5	9.0	1.4	73.5	
第66図	1	打製石鏃	ガラス質安山岩	SX36	2.1	1.5	0.25	0.5	凹基無茎式
	2	打製石鏃	ガラス質安山岩	SX36	2.5	1.4	0.4	1.2	平基無茎式
第73図	32	石族未製品	姫島産黒曜石	C2区3層	1.75	1.35	0.25	0.6	
	33	剥片	姫島産黒曜石	E3区3層	5.6	2.4	0.8	9.1	摘みあり
第73図	34	石核	姫島産黒曜石	E3区3層	2.7	5.5	1.25	17.7	
	35	剥片	姫島産黒曜石	F3区3層	4.1	3.2	0.5	8.7	
	36	扁平打製石斧	結晶片岩	F3区3層	10.9	5.7	0.95	94.9	
	37	扁平打製石斧	結晶片岩	E3区3層	14.9	6.4	1.5	192.6	
	38	扁平打製石斧	結晶片岩	E3区3層	15.35	7.5	1.15	188.3	39と重なって出土
	39	扁平打製石斧	結晶片岩	E3区3層	16.3	8.15	1.45	226.8	38と重なって出土
	40	磨石	河原石円礫	E3区3層	7.9	7.6	3.2	357.6	
	41	打欠石錘	河原石円礫	F3区3層	7.0	5.7	1.8	74.0	
第74図	49	石庖丁	輝緑凝灰岩	D2区3層	4.0	(2.9)	0.7	11.6	
	50	石庖丁	?	B2区3層	(5.5)	(2.0)	0.6	9.1	
第77図	107	紙石	?	C2区3層	(4.1)	(3.7)	1.9	42.6	
	108	紡錘車	滑石	C2区3層	4.4	4.4	1.0	35.7	軸孔径9mm
	109	紡錘車	結晶片岩	F3区3層	4.1	(2.8)	(0.6)	10.8	軸孔径5mm
	110	紡錘車	滑石	F3区3層	(2.9)	(1.9)	1.2	8.8	復元直径3.8cm. 軸孔復元径5mm
	111	小玉	滑石?	3層	0.4	0.4	0.35	0.1	

土製品観察表

挿図番号		器種	出土地点	法量(単位cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
第7図	6	土人形	SD3	(4.2)	(4.2)	0.8		
第16図	6	土人形	SK20	(8.3)	(6.2)	0.6		多量の滑石含む
第49図	4	土玉	SK82	2.4	2.1	1.4	6.6	直径3mmの穿孔
第50図	3	輪羽口	SK87	(3.35)	(3.75)			被熱により赤変
第56図	4	管状土錘	SD22	(4.3)	1.0		4.1	孔径4mm
第59図	24	管状土錘	SD66	4.7	1.3		7.2	孔径5mm
第77図	91	ミニチュア土器	C2区3層	口径3.6		高2.5		
	92	ミニチュア土器?	D2区3層	直径4.4		1.6		上面指頭押圧
	93	ミニチュア土器?	D2区3層	直径4.3		高1.5		上面指頭押圧
	94	棒状土錘	A3区3層	(5.85)	1.9	1.75	25.1	孔径5mm
	95	棒状土錘	C3区3層	(4.65)	1.4	1.4	13.1	孔径4mm
	96	棒状土錘	B2区3層	(4.0)	1.9	1.7	17.2	孔径5mm
	97	管状土錘	D2区3層	(4.2)	1.65		8.7	孔径2mm
	98	管状土錘	E2区3層	(1.0)	1.5		8.8	孔径4mm
	99	管状土錘	D2区3層	5.3	1.4		8.9	孔径3mm
	100	土玉	D2区3層	1.95	1.95	1.9	6.6	直径3mmの穿孔
	101	土製円盤	3層	2.7	2.6	0.5	5.6	
	102	輪羽口	E3区3層	(3.0)	(2.6)	1.45		

金属製品観察表

挿図番号		器種		出土地点	法量(単位cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
第8図	8	鉛製品	火縄銃弾?	SD3	0.9	0.9	0.9	4.3	
第16図	7	鉄製品	釘	SK20	(4.0)	(0.3)		4.6	
第18図	1	鉄製品	釘	SK21	(3.0)	(0.35)		6.6	
	2	鉄製品	釘	SK21	(4.0)	(0.6)		7.2	
第20図	4	鉄製品	刃物	SD23	(3.8)	1.0	0.4	7.6	
	5	銅銭	寛永通寶	SD23	2.5	2.5		2.5	新寛永銭
第32図	6	鉄製品	刃物	SX16	(4.5)	1.0	0.4	5.4	
第39図	5	鉄製品	板状	SH70	(2.1)	(3.3)	0.35	6.1	
	6	鉄製品	板状	SH70	(3.1)	(4.5)	0.4	9.8	
	7	鉄製品	釘	SH70	(4.0)	0.7		2.0	
	8	鉄製品	刃物	SH70	(3.1)	(0.9)	0.4	6.2	
第77図	103	鉄製品	刃物	2層	(6.4)	(1.1)	0.6	17.3	
	104	鉄製品	刃物	C1区3層	(5.5)	2.4	0.5	21.9	
	105	鉄製品	釘	F3区3層	(5.8)	(0.3)		3.5	
	106	鉄製品	釘	F3区3層	(8.6)	(0.5)		8.6	